HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストリア＝ハンガリー二重帝国の構造と特質(五)(完)：ハンガリーの立場を中心に
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Description	論説
Citation	北大法学論集, 26(3), 157-232
Issue Date	1976-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/27944
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(3)_P157-232.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

オーストリア＝ハンガリー二重帝国の構造と特質（五）（完）

――ハンガリーの立場を中心に――

矢田俊隆

目次

はしがき
一　学説史的展望
二　政治的結合と経済的発展の問題
三　帝国両半部の経済成長の比較
四　共同関税地域の影響（以上第二五巻第二号）
五　ハンガリー経済成長の前提
六　外国資本の役割――第一期
七　外国資本の役割――第二期
八　経済面の総括的考察（以上第二五巻第四号）

九　改革時代のジェントリー
一〇　ジェントリー階級の衰退
一一　ジェントリーの退廃と反動化（以上第二六巻第一号）
一二　ブルジョアジーとユダヤ人
一三　マジャール人とユダヤ人の関係
一四　ハンガリーの反ユダヤ主義
一五　ユダヤ人ブルジョアジーの「封建化」（以上第二六巻第二号）
一六　社会生活の一般的水準（以下本号）
一七　経済成長と非マジャール系諸民族
一八　非マジャール系諸民族の社会構造
一九　諸民族の民族運動とその性格
二〇　民族運動と社会運動の接点、政治的要因
むすび

一六　社会生活の一般的水準

次に、十九世紀後半以後のハンガリーの急速な経済成長が、他の社会層にどのような影響を及ぼしたかを、見なければならない。それは、ジェントリーよりも下層の農民や旧来の手工業者＝職人層に、また資本主義の発展とともに数を増した労働者階級に、何をもたらしたであろうか。総じてそれは、国内の生活水準の改善といった基本問題を、どの程度解決することができたであろうか。他方、資本主義が不可避的に伴った矛盾や弊害に対しては、どのような社会的反応が現われたであろうか。

まず農業関係をみよう。ごく少数のマグナートと、これまた比較的少数のエリートであるジェントリーの下には、中・小独立農民がピラミッド型に広がっていた。一八九五年の統計調査によれば、[1] 二〇〇～一、〇〇〇ホールドの土地所有者であるジェントリーの下には、一〇～二〇〇ホールドの所有地が一〇、八〇〇、五〇～一〇〇ホールドの所有地が三九、〇〇〇、二～五〇ホールドの所有地が二三五、〇〇〇、一～二〇ホールドの所有地が四六〇、〇〇〇という形になっており、このピラミッドの幅広い基底は、多数の零細農民および土地のない人々から成っていた。同じ年の統計は、[2] 五～一〇ホールドの所有地がハンガリー王国で四〇〇、〇〇〇以上、クロアティアで一一〇、〇〇〇、一～五ホールドの所有地がそれぞれ七一七、〇〇〇と一二六、〇〇〇、一ホールド以下の所有地がそれぞれ五六三、〇〇〇と五四、〇〇〇、まったく土地のないもの（賃金労働者）が一、七〇〇、〇〇〇人に達したことを示している。

そのうち中・小農民は、この国の経済生活における重要な一要素をなしていた。土地改革は、受益者である農民には寛大で、彼らからなんら代償を要求しなかった。しかしその受益者は農村の全人口の½強にすぎなかったうえに、土地改革は、経済的結果という点では、彼らにまったく幸いしたわけではなかった。早くから家族計画の習慣を取り入れていた南部ハンガリーの節倹なドイツ人農民を除いて、大多数の農民は、改革直後の時期にも、必要な装備を行なうことがむずかしく――これには、オーストリアに比べてクレジットの期間が短かく、しかも高くついたことも関係していた――、収税吏の要求に応ずることもはなはだ困難であることを、痛感していた。そして簡単に、以前の労役の近代化された形態に復帰し、小作が一般的な制度になってしまった。[3] 唯一の資産ともいうべき賦役を奪われたサンダル貴族の多くも、彼らの仲間に加わった。

ただしこれらの中・小農民も、改革後約二〇年間は、高い農産物価格の利益を受け、かなり恵まれた生活をしていたようにみえる。しかしながら、一八八〇年代の大農業不況の到来は、人口の増加とも重なり合って、事態の異常な

悪化をもたらした。土地所有農民の大多数は破滅に瀕し、十九世紀末の三十年間に売り立てられた農民の所有地は一一八、〇〇〇に及び、[4] 所有地の再分割も大規模に始まった。ただ所有地に葡萄園や市場向けの果樹園が含まれている場合には、わずか二～三ヘーカーにすぎなくても、所有者や借地人に十分な生活を与えることができたが、零細所有地の大部分は純粋な農業向きの土地であり、その持主は他の生活手段をもたぬ人々であって、彼らの大多数は最低水準を下まわる生活をしていた。当時一家族の生活を支える最小限の土地は、普通八ホールドと考えられていた。

土地をもたない人々の生活状態も、同様の悪化をこうむった。彼らは賃金生活者となるほかなかったが、土地改革後の最初の時期には、特に賦役が広く行なわれていた地方では、労働力が非常に不足していたので、日雇い農夫や労働の提供を望む農民家族の成員は、十分な賃金を得ることができた。続いて、鉄道建設をはじめとする大公共事業の時代がやってきたために、所有地における労働力の供給はなお不足しており、若干の地主はイタリアやダルマティアから収穫期の労働力を輸入したほどで、[5] その賃金は、公共事業の人夫同様まだたっぷりしていた。しかし一八八〇年代にはいると、公共事業は減少し、またみずから困難におちいった地主は、労働力を節約するために機械化を進め、賃金を支払わねばならぬ場合にも、それを切りつめた。最大の切りつめは、収穫期労働者の現物取得分について行なわれたが、その被害をもろに受けたのは、ほとんど全面的にこの仕事に依存していた零細農民およびまったく土地のない人々であって、それはいまや膨大な階級になっていた。彼らは収穫から収穫へ渡り歩いて、自分たちが取りいれた作物のうち家にもち帰ることのできた取得分で生活していたのである。他方農場労働者も、いまや労働の供給が需要を上まわったことによって、大きな痛手をこうむった。

こうして零細農民や土地のない人々の間で支配的になった貧困は、恐るべきものがあった。一八九六年の調査によれば、[6] 自己の家庭を離れた季節労働者はしばしばパンのみを常食にし、温い食物を得ることはごくまれであった。あ

るカルパティア地区の住民は、「脂肪や肉なしで、もっぱら酸づけのじゃが芋を常食にしていた」し、また他の地区では、「乾燥した、もしくはとうもろこしの粉と混ぜ合わせた豆、キャベツのスープにつけたり生キャベツのうえにのせたりした、煮たり焼いたりしたじゃが芋、あるいはみじめなとうもろこしのパンを、もっぱら常食にしていた」。

農業労働者の貧困は、一日の労働に対して支払われる賃金の低さに帰因しただけではなく、彼らの労働日が概して一年に七〇～九〇日を越えなかったという事実にも由来していた。無為を強いられる長い冬は、小農民や零細農民のかせぎ高を減らしたし、他方工場の発達は、彼らの家の婦人たちが以前家計を補っていた副業的なかせぎ高を切り取ってしまった。

次に工業方面に目を向ければ、工業労働者の生活にも同様の衰退がみられた。工業が大規模な発展をみせはじめた当座は、熟練労働力はなお非常に乏しかったので、熟練労働の提供者はしばしばオーストリアやドイツから輸入されたほどであり[7]、比較的高い賃金とよい条件を得ることができた。しかし、機械の使用が次第に一般化し、過剰人口が地方から都市に集中しはじめるにつれて、事態はだんだん悪化していった。当時の自由主義哲学は、需給法則の自由な作動に好意的であったし、また地主は、労働力を土地から引き離すという理由で、工業における高賃金に反対した。さらにまた、一般に政府と雇用者は、ハンガリーは賃金や労働条件の点でオーストリアを上まわるだけの余裕はないと主張したが、これは必ずしも理由のないことではなかった。実際、工業労働者の賃金はほとんど横ばい状態を続けた。一九〇〇年の調査によれば[8]、男子の二八％は週一四～二〇クローネを、四八％は六～一四クローネを、一五％は六クローネ以下をかせいでいた。婦人のかせぎ高が男子に比して少なかったことは、いうまでもない。また、幼・少年労働者の労働時間は、一八八四年に通過した法律で制限されていたが、成年労働者の労働時間は無制限に放置されていた。一九〇〇年の調査によれば、工場における最も普通の労働日は、休憩を含んで一二時間であり、婦人の場合は

九～一〇時間であった。ブダペストの住宅事情はウィーンよりもわるく、一九一〇年には、人口の約一〇％は、一室あたり一〇人ないしそれ以上の割合で生活しており、一室あたり一～二人というケースは、わずか六・三％にすぎなかった。なかには、ほら穴や野原に掘った穴で生活しているものもあり、また一九〇五年の警察の捜査で、三五人のものが身体をロープでしばりつけて木のうえに寝泊りしていることが、明らかになった。(9)

十九世紀後半、経済成長が始まった時期に、ハンガリーにはなおかなり広範囲な職人層があり、控え目ながら不足のない生活を送っていたが、彼らの運命もまた、オーストリアの場合と同じく、衰退の可能性を含んでいた。ただ後者に比べて、工場による競争が相対的に弱かったために、その衰退はより緩慢であったが、それにしても十九世紀末の彼らの地位は、半世紀前より著しく悪化していた。

こうして、第一次大戦に先立つ四分の一世紀の間におこった急速な経済成長は、ハンガリーにおける大所有地や封建制の残滓を廃棄しもしくは生活水準を改善するといった主要な社会問題を解決することはできず、むしろ経済成長につながる負担と犠牲を負わされ、しかも成長の結果からほとんど恩恵をこうむらない人々が、多数にのぼった。農業関税が食料費を高騰させる一方、カルテルがまた工業製品の価格を高騰させる原因となり、(10)ハンガリーでは全人口の約半分が、人並み以下の水準で生活していたのである。経済成長の結果かえって増大した社会的緊張や矛盾は、世紀転換のころには次第に鋭さを増し、ハンガリー社会の内部に幾多の反応を生み出さずにはおかなかった。その一つは、こうした事態に対する反抗運動であり、社会問題は同時に政治問題として、ますます大規模にかつ切迫した形で表面化した。いま一つは、貧困を脱出するために、国外への移住が著しく増大したことである。両者を簡単にいちべつしよう。

前者で特に注目されるのは、労働者の態度である。農業労働者に対する政府の姿勢には、同一の伝統に愛着をもつ

というある種の感情から、心理的敵意という要素は欠けていたが、しかしその反面、農業労働者の要求は地主に対する直接の脅威を意味したから、政府は、この階級による組織化の試みに強く反対し、アウスグライヒ後二十年近くは完全にこれを抑えることに成功した。しかし、一八九〇年ころになって、地主が刈り取り人に与える現物給付を次第に減らしたところから、多くの所有地で農業労働者の反抗がおこった。一八九一年と九四年にはデモが行なわれ、軍隊がこれを追いはらう際に、流血の惨事が生じている。一八九六年は、ハンガリー建国一千年祭がはなやかに行なわれた年であったが、その翌年には農業労働者の大規模なストライキがおこり、また九七年から翌年にかけて、飢えた農業プロレタリアートの絶望的な暴動が各地で当局との間に衝突を引きおこし、前年の栄光を忘れさせた。(11)

社会問題が政治問題として切迫した形で登場したのは、農村地域に限られたわけではなかった。工業労働者の組合運動は一八六〇年代に始まり、また一八九〇年十二月にはハンガリー社会民主党が設立され、十九世紀末までに、党と組合はともにしっかりした基礎を定めていた。労働者の政治運動も九〇年代にはいると次第に活発化したが、一八九八年三月十五日にブダペストの街頭で、一八四八年の民族的反乱の五十年祝典をインターナショナルを歌って妨害した工業労働者の行進は、彼らの数の増加と政治意識の成長を示したものとして、とりわけ注目される。(12) これらの出来事に対して、政府は思いきった緊急措置のほかに、労働者組織に対する警察監視の徹底的な強化をもって答えたが、「第四身分」の反抗による社会の騒擾は、旧来の国家＝社会秩序が外部から脅かされはじめたことを物語るものであり、ハンガリー支配体制の存続の可能性に大きな不安をなげかけた。

次に、この時期のハンガリーで特に注目される海外移民に目を向けよう。移民の著しい増加は、一方における急速な経済成長にもかかわらず、大部分の人々の生活に実質的改善がなかったことを示している。バラニ教授によれば、移住によるハンガリーの純人口損失は、一八六九～一九一〇年の間に約一二五万であったが、(13) この数字は、オースト

リア・ドイツ・ロシア・バルカンへの大陸移住を含むとはいえ、海外特にアメリカ合衆国への移民が大きな割合を占めていた。統計の示すところでは、海外移民の数は、一八八六～九五年の間は年平均約二五、〇〇〇であったが、その後次第に上昇し、一八九九年には四三、〇〇〇、一九〇〇年には五五、〇〇〇、一九〇一年には五一、〇〇〇、一九〇二年には九二、〇〇〇、一九〇三年には一二〇、〇〇〇に達している。海外移民のほかに、一八八〇～一九一〇年の間に、約三〇〇、〇〇〇のハンガリー人がオーストリアに、四二、〇〇〇人がドイツに、一〇二、〇〇〇人がルーマニアに移住している。[14] なお移民問題の背後には急テンポの人口増加があったことも、見のがされない。クロアティア＝スラヴォニアを含めて、ハンガリーの人口は一八五〇年には約一、三〇〇万であったが、一八六九年までに一、五五〇万に増加した。次の十年間はコレラの流行したせいもあって、一八八〇年の調査は約二五万の増加を示しているにすぎないが、その後増加のペースは旧に復し、一八九〇年には一、七五〇万、一九〇〇年には一、九二五万となっている。[15] しかもこの時期には大規模な移民がすでに行なわれていたことを思えば、異常な人口増加といわねばならないし、この移民は、農村の人口過剰の最もはげしい地域で始まっているのである。アメリカ合衆国の一八九八／九～一九一二／一三年間の統計によれば、内部ハンガリー（クロアティア人とセルビア人の一部が除かれ、ルテニア人も無視されている）からの移民の数は、スロヴァキア人四三二、〇〇〇、マジャール人四〇二、〇〇〇、ドイツ人二一九、〇〇〇、ルーマニア人四七、〇〇〇、セルビア人三〇、〇〇〇となっている。しかしハンガリー側の一九〇五～一三年間の見積りでは、マジャール人二八七、〇〇〇、スロヴァキア人一九七、〇〇〇、ドイツ人一五〇、〇〇〇、ルーマニア人九五、〇〇〇、セルビア人五〇、〇〇〇、ルテニア人三六、〇〇〇、その他八、〇〇〇となっている。[16] いずれにしても、大規模な移民が始まったとき、それは主としてスロヴァキア人地域からのものであり、百分比でいえば、一九一三年まではスロヴァキア人の比率が最大で、マジャール人が最小であった。しかし、絶対数では、

マジャール人が一九〇五年にスロヴァキア人を抜き、その後は毎年移民総数の約⅓をしめている。[17]

以上の考察から知られるように、当時のハンガリーの最大の特色は、封建的な大所有地の存在と広く行きわたった農村の貧困であった。この国の経済は相変わらず農業が圧倒的で、急速な工業的成長の時期（一九〇〇～一九一〇）にさえ、農業で生計を立てる人々の数が増えたというのが、実情であった。[18] 工業化の刺激的な徴候はあったにせよ、封建的な地主気質の残滓がそれにブレーキをかけたために、工業は増加する人口の圧迫を吸収するに足るほど急速には拡大せず、その結果、大量の集団移住がおこったのである。ハンガリーのショーヴィニスティックな歴史家たちは、この大規模な国外移住を「国民的悲劇」とよび、他方ヤーシは「ハンガリーを革命から救った安全弁であった」と述べているが、バラニ教授はいずれも一面的であるとし、集団移住への参加者が彼ら自身および彼らの旧・新の祖国（ハンガリーとアメリカ合衆国）をひとしく助けることができた点に目をつけて、海外への集団移住を自発的で強力な対外救援計画 foreign aid program とよんでいる。[19]

その評価はしばらくおくとして、ここで特に注目する必要があるのは、移民の大多数が農民特に非マジャール系諸民族の出であったという事実であり、[20] このことは、経済的高揚から生じた利益がさまざまな民族の間に不平等に分配されたことを、明示している。そこでわれわれは、これまで留保してきた、あらゆる事柄の背後に伏在する最も重要な問題、支配民族であるマジャール人と他の非マジャール系諸民族の間の格差と対立の問題に目を向け、ハンガリーの経済成長がこの基本問題にどのような影響を及ぼし、さらに諸民族の民族運動の性格をどのように規定したかを、根本的に検討しなければならない。この点の解明は、二十世紀にはいって急速に激化した労働運動と民族運動の微妙な関係を理解するうえにも、多くの重要な示唆を与えるであろう。

(1) Macartney, op. cit., p. 715.
(2) op. cit., p. 716.
(3) J. Mailáth, La Hongrie Rurale, Sociale et Politique, Paris 1909, p. 22 ; Macartney, op. cit.
(4) Macartney, op. cit.
(5) Mailáth, op. cit.
(6) J. Bunzel, Studien zur Sozial- und Wirtschaftspolitik Ungarns, Leipzig 1902, S. 11 ff.
(7) 一八七五年のブダペストで行なわれた調査によれば、対象となった一〇、〇二〇人の労働者のうち、二四、九%はハンガリー外で生まれたものであった。Macartney, op. cit., p. 717.
(8) ibid.
(9) Macartney, op. cit., p. 718.
(10) Ránki, "Comments", p. 67.
(11) Süle, op. cit., S. 1. このストライキは成功し、収穫の賃金分は四〇～五〇%引き上げられた。
(12) ibid.
(13) Barany, "The uncompromising Compromise", p. 257. なおベレンドとラーンキは、十九世紀末から第一次大戦の始まるまでの時期に、ほぼ二、〇〇〇、〇〇〇の貧しい労働者や農民がこの国を離れ、それらの六六・九%は非マジャール系であり、そのうち二五%はスロヴァキア人、一八・四%はドイツ人、一五・四%はルーマニア人であったとしている。"Economic Factors", p. 185.
(14) International Migrations, vol. 14, pp. 714～728 ; Macartney, p. 702 f. オーストリアへの移民は主としてドイツ人（大部分は西部ハンガリーからウィーンないしグラーツに移動した）であり、他のヨーロッパ諸国への移民は主としてルーマニア人（ルーマニアに移ったものの三分の二は、ハンガリー内のルーマニア人であったが、ブカレストに移ったセクラーもかなりの数にのぼった）、続いてドイツ人、マジャール人の順であった。ユダヤ人の西方への流出もかなりあったが、それはガリツィアからの継続的な流入によって相殺された。
(15) Macartney, op. cit., p. 702.

(16) Macartney, op. cit., p. 727.

(17) ibid., Barany, p. 257. 十九世紀末期には、ハンガリーからアメリカ合衆国への移住は大部分スロヴァキア人であり、オーストリア＝ハンガリーの移民全体のうちでそれの占める割合は、一八九九年には、マジャール人の七・八%に比して二五・二%であった。世紀転換後、マジャール人移民の百分比は急速に増加した。一九〇五年以降、彼らは合衆国に出かけるハンガリー国民の最大の派遣団を供給した。一九一〇年には、合衆国に居住するハンガリー生れの人々の四六%は、自国語をマジャール語と報告している。

(18) 耕地の面積は、一八七〇年の一、〇〇〇万ヘクタールから一八九〇年の一、二〇〇万ヘクタールに上昇し、一九〇〇年にはこの国の全面積のわずか五%が耕作不能な土地として分類されるにとどまった。これに比して、一八四八年には、耕作不能地は四五%に達していたのである。絶対数のうえでも、農地で働く人々がかなり増えたことは、確かである。ハンガリーが十九世紀末にもなお主として農業国であり、農業が最大の産業であったことは、次の数字からうかがわれる。一九〇〇年にも、ハンガリー王国中の一一、二〇〇、〇〇〇人（六六・五%）は相変わらず農・林・漁業で生計を立てており、八〇%はなお各地に散在している農場・村落・小さな町に住んでいた。Macartney, op. cit., p. 705.

(19) Barany, op. cit., p. 257; Macartney, op. cit. なお集団移民の評価については、Jászi, The Dissolution of the Habsburg Monarchy, pp. 233, 238; Szekfü, Három nemzedék, p. 456 f.; Hanák, "Skizzen", S. 2. 参照。なおこの問題は後章で再度取りあげられる。

(20) Barany, op. cit.

一七　経済成長と非マジャール系諸民族

本章の課題は、十九世紀後半以後のハンガリーの経済成長がマジャール人と非マジャール系諸民族にそれぞれどのような影響を及ぼしたかを、確かめることである。幸いにも最近のハンガリー史学は、これについて多くの貴重な統計的資料[1]と有益な視点を提供しているので、ここでもまずそれらを手がかりにしながら、当時のハンガリーの資本主義的発展の基本的特徴を明らかにすることから出発しよう。

最近の地方的研究の成果は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時点で、ハンガリー国内のさまざまな民族の居住地域の資本主義的発展の水準に大きな差があり、同時に、この国の経済生活の各部門に対するこれら諸地域の関与の仕方にも顕著な違いがあったことを、示している。具体的にいえば、非マジャール系の人々が多数居住していた地域は、全体として、経済発展の状態および社会構成のブルジョア化という点で、大平原（アルフェルド）Alföld および（ドゥナントゥール）ドナウ川以西地方 Dunántúl を中心とするマジャール人居住地域に及ばなかったし、さらに非マジャール人の居住地域は、これまた明瞭に二つのグループに分かれていた。[2] 第一グループは比較的進んだ地域で、(a)北部ハンガリーのスロヴァキア人地域、(b)西部ハンガリー（国境付近）のドイツ人（一部はクロアティア人）地域、(c)さまざまな民族――ドイツ人、南スラヴ人（とりわけセルビア人の九〇％はここに生活していた）、ルーマニア人、スロヴァキア人――の居住する南部ハンガリーの三つから成っていた。これらの地方は、農業の分野で（南部ハンガリー）、あるいは大工業の分野で（スロヴァキア人地域）、もしくは双方の分野で（西部ハンガリー）、マジャール人居住地域に集中した資本主義的発展と関係をもち、特殊な生産部門では――南部ハンガリーでは商品的な穀物生産、スロヴァキアでは鉄・繊維・紙・木材・皮革・砂糖工業において――マジャール人居住地域の関与の割合を凌ぐほどであった。それゆえ南部ハンガリーでは、農民層の分解は一般にマジャール人居住地域よりも進んでいたし、他方スロヴァキア人地域では、大工業労働者の比例数は、ブダペストを除くマジャール人地域よりも大きかった。すなわちスロヴァキア人地域では、工業労働者は一、〇〇〇平方キロメートルあたり八九〇人、居住者一〇万人につき一、四九〇人であったが、首都を除くマジャール人地域では、それぞれ四七〇人と一、〇四〇人だったのである。[3]

南部地域の農業における、また北部ハンガリーの工業における資本主義的発展のもたらした重要な結果の一つは、セルビア人・ルーマニア人・スロヴァキア人の農業労働者およびスロヴァキア人・ルーマニア人の大工業労働者がかな

り大量に発生したことである。たとえば、スロヴァキア人はこの国の人口の一〇・七％をしめたが、[4] 大工業労働者については一三・一％を提供している。六一、〇〇〇人にのぼるスロヴァキア人の、また三四、〇〇〇人にのぼるルーマニア人の大工業労働者、家族を合わせて一二五、〇〇〇人に達するセルビア人・ルーマニア人・スロヴァキア人の農業労働者は、全国的な見地からみても、社会運動の重要な力であったといってよい。

しかし、民族ブルジョアジーの形成という点では、これらの地域の資本主義的発展は、さして重要な結果をもたらさなかった。なるほど、商品生産を行なうセルビア人とドイツ人の富裕な中農層が広範に発生したこと、また、工業面でスロヴァキア人の中・小ブルジョアがある程度強化されたことは、一応注目される。一九〇四年の統計によれば、一人以上の雇い人を使って操業するスロヴァキア人の工業経営者は五、〇七四人に達し、南スラヴ人（一、八五四人）、ルテニア人（八三人）の工業経営者の総数を凌駕した。しかしそれも、全国との関係でみれば六・三％にすぎず、スロヴァキア人地域でも、スロヴァキア人の手中にあった経営はせいぜい二八～三〇％にすぎなかったと見積られている。しかも前掲の五、〇七四のスロヴァキア人経営のうち、五人以上の労働者を使っていたのは二〇三にすぎなかった。[5] このことは、大工業のうちにスロヴァキア人のブルジョアジーがほとんど含まれていなかったことを物語っている。南部ハンガリーの農業においても北部ハンガリーの工業においても、資本主義的発展はまず第一に、そしてほとんど独占的に、マジャール人[6]とドイツ人の大地主および大資本家を利したのであって、多数を占める非マジャール系住民の間からは、それらの地域の経済生活を指導するような支配階級は、出現しなかった。資本主義的農業の発展から利益を得た大・中地主の九〇～九五％は、マジャール語ないしドイツ語を自国語とする人々であったし、大工業経営所有者の場合は、両者のしめる割合がいっそう高かった。ただ南ハンガリーでは、セルビア人・ルーマニア人・シュワーベン（ドイツ人）の富裕な農民は、マジャール人やドイツ人の大・中地主とならんで、資本主義的農業の

発展のうえで、従属的ながらもある程度の役割をもつことができたが、北部のスロヴァキア人地域では、スロヴァキア人の中・小ブルジョアジーは、工業発展のうえでなんら重要な役割をかちとることはできなかった。その他の非マジャール系諸民族の間では――ドイツ人を別にして――中・小工業におけるブルジョアジーの発展は、スロヴァキア人のそれにもはるかに及ばなかったのである。

非マジャール人が多数をしめる地域の第二グループには、(d)北・東ハンガリーのルテニア人地域、(e)東部ハンガリーのルーマニア人地域、(f)ルーマニア人とザクセン人の住むトランシルヴァニアが数えられる。これらの地域では、農業と工業の発展は、マジャール人地域および非マジャール人地域の第一グループに比してはるかに劣っており、資本主義的発展とブルジョア化の過程も緩慢で遅れていた。ただ個々の地区では、かなり多額に投資された資本主義的発展もみられないではなかった――ハンガリー大平原の北東部および東部辺境の農業、Krassó-Szörény 県、Hunyad 県の各地およびザクセン地域における工・鉱業がそれである(7)――が、それらも、この地域全体の一般的後進性を変えるものではなかった。第一グループのスロヴァキア人地域も、農業の発展にかんしては、また南部地方も工業の発展にかんしては、むしろ第二グループに数える方が適当であるが、これらの地域では、ある経済部門に存在する遅れが、他の部門における比較的急速かつ強度の発展によってかなりならされていた点が、特徴的である。

第二グループに属する地域はハンガリー全土の二八・三%を含み、そこには総人口の二一・四%が居住していたが、この国の経済的・社会的発展に対する関与の割合は、あらゆる分野で地域指数ないし人口指数をはるかに下まわっており、たいていの場合半分にも及ばなかった。すなわち、工業関係の運輸に従事するもの一四・四%、大工業の労働者九・二%、大工業経営九・七%、信用機関の預金現在高九・二%、抵当権現在高一三・二%、鉄道路線一八・三%（一九一〇～一九一三）となっているのである(8)。これらの地域でも、世紀転換のころになってようやく、農業的

商品生産と大工業の発展がいくらかみられるようになったが、それもなお遅れを取りもどすには足りず、むしろ資本主義的発展の発端の段階にあったというべきであり、大部分の農民経済では、なお商品生産は行なわれていなかった。

これらの地域で非マジャール系民族社会のバックボーンを成したのは、なお非常に未分化な――あるいは階級分解とブルジョア化の始点に停滞している――農民であった。一九一〇年にルテニア人農民の六六・五％、ルーマニア人農民の六〇％は、五〇ホールド以下の土地所有者であったが、同じ時期に、このカテゴリーに属するものは、スロヴァキア人では四七・六％、ドイツ人では三四・五％、マジャール人では二七・五％にすぎなかった。他方、工業・商業・交通で生活していたのは、ルテニア人では四・八％、ルーマニア人では七・九％にすぎず、セルビア人の一四・七％スロヴァキア人の二〇・一％、ドイツ人の三七・二％、マジャール人の三〇・六％と著しい対照をなしている。(9)

これら東方の非マジャール人地域および農業の発展の点でそれに近い関係にあったスロヴァキア人地域から、一八九九～一九一三年の間に五三〇、〇〇〇人が国外に移住したが、(10)これは移住者の四五％にあたり、またこれら地域の住民（一九〇〇年の調査による）の九・八％にあたっている。これらの地域に生活していたのは人口の三三％にすぎなかったこと、また移住者の指数がマジャール人地域では七・九％、南部ハンガリーでは五・八％であったことを思えば、(11)東・北部地域の貧困を察することができよう。

ここで一般的に、非マジャール系諸民族の農民の地位を、マジャール人のそれと比較してみよう。一八四八年に農奴制が廃止されたあと、ハンガリーでも農業の資本主義的発展が広がりはじめ、それは領内の従属諸民族――スロヴァキア人、ルーマニア人、ルテニア人、セルビア人はいずれも農民的民族であった――の間にも及んだ。非マジャール系農民の多くは、小自作農となるか、あるいは、比較的小さな土地のブルジョア的所有者になったが、主としてマ

ジャール人の住むハンガリー中心部の農業地帯に比べれば、その規模ははるかに限られており、非マジャール系農民の状態はマジャール人のそれに比してはるかに劣悪であった。その理由としては、次の三点が考えられる。第一は、彼らの土地がやせていたことである。セルビア人の住んだ南部諸地域を別にすれば、非マジャール系民族居住地域の大部分は、山地か丘陵性の土地で、地味はやせており、中心部の平原地帯のように穀物生産に適していなかったので、これらの地域の農業家たちは、マジャール人の農場主に比べて、資本主義のブームから利益を得ることが少なかった。一九一〇年の土地税をみれば、大平原（アルフェルド）では一ホールドあたり一・八七クローネ、ドナウ川以西（ドウナーントゥール）地域では、一・九七クローネに達しているが、ルテニアでは〇・三五クローネ、トランシルヴァニアでは〇・四七クローネ、スロヴァキアでは一・〇二クローネにすぎなかった。(12) これは、上述の傾向を端的に示すものといえる。

第二は、先にもふれたように、非マジャール系農家の土地所有が、マジャール人地域のそれに比してはるかに小さかったことである。それはあまりに小さすぎたために、資本主義的な方式で開発されることは困難であり、この方式によるものは、実際にはほとんど無視してもよいほどであった。平均面積一〇ホールド以下という土地は、所有者に飢餓水準をこえる生活を与えることはほとんど不可能だったのである。さらに、同じ広さの土地でも、大平原とスロヴァキアやトランシルヴァニアの山地とでは、経済上の重要性が違っていたし、そのうえ、非マジャール系諸民族の土地の大部分では、ハンガリーの中心部に比べて、耕地のパーセンテージがはるかに低かった。マジャール人の居住地域では四八・三%、セルビア人の住んだ南部ハンガリーでは七〇%が耕作に適していたが、ルーマニア人の土地ではわずか三〇%、ルテニア人の土地では二一・二%しか、耕作できなかった。(13)

第三の理由としては、土地配分の不均等をあげなくてはならない。たとえば、トランシルヴァニアでは、農地の七一・八八%は五ホールドないしそれ以下の大きさであったが、それらすべてを合わせても全面積の二九・五%にしか

あたらなかったし、[14] クロアティア、スロヴァキアその他の非マジャール人地域でも、事情はほとんど変わらなかった。この不均等な土地の配分が、これらの地方の異常に低い生産性の、したがってまた多くの農民がその日暮らしの生活を強いられたことの大きな原因であったことは、明らかである。

次の数字は、以上の点をさらに補足するであろう。一九一〇年に、マジャール人はハンガリー全人口の約五〇％を占めるにすぎなかったのに、一、〇〇〇ホールドを越える所有地の九一・四％を所有していたが、他の諸民族は全部を合わせて、その八・六％を所有したにすぎなかった。他方、五ホールド以下の小所有地は、全体の六一・七％が非マジャール人に属していた。さらにトランシルヴァニアでは、五ホールド以下の小所有地の七〇％、スロヴァキアでは六九・四％が、それぞれルーマニア人とスロヴァキア人に保持されたが、一、〇〇〇ホールドを越える大所有地では、スロヴァキア人の保有分はわずか五・七％、ルーマニア人の保有分は一・四％にすぎなかった。他方、トランシルヴァニアでは、大所有地の八五・七％、スロヴァキアでは八三・六％がマジャール人に属し、一〇〇～一、〇〇〇ホールドの中型所有地においても、程度の差はあれ同様の不均衡が存在し、その六〇％はマジャール人の手中にあり、スロヴァキア人とルーマニア人に所有されたのは、わずか二〇％にすぎなかった。[15]（ただその際、次の点には注意を払う必要がある。ハンガリーの中部および西部地域では、資本主義的発展の水準が高かったために、土地所有農民の統合が貧困な非マジャール人地域においてよりも急速に進んだ結果、ハンガリーでは、貧しい小所有地の持主は大部分少数民族の農民であったが、土地をもたない農業プロレタリアートの大多数はマジャール人であるという、奇妙な逆説的現象が生まれた。農業プロレタリアートは、大平原では全農業人口の五二・四％、ドナウ川西部地域では三八・一％を占めたが、トランシルヴァニアでは三七％をしめたにすぎなかった。[16]）

以上の考察から、非マジャール人地域の大部分で農民が貧困であり、[17] 農業面で資本主義的発展が遅れた事情は、ほ

ぼ明らかになったと思われる。

次に工業面をみよう。非マジャール人諸地域における工業の発展は、一般にほとんど例外なく、外国のまたオーストリア＝ハンガリーの大資本の浸透と結びついていたために、それはまず第一にマジャール人（マジャール化したユダヤ人を含む）の支配階級、ミドルクラスの発展を促進した。このことは、農業および工業に従事した人々の地域別、自国語別の分布を比較することによって、知ることができる。一九一〇年にマジャール人とドイツ人は三八の県で住民の多数を占めたが、工業に従事した人々については、五五の県で多数を占めていた。一方、非マジャール系諸民族はわずか八県で――スロヴァキア人六県、ルーマニア人二県で――多数を占めたにすぎなかったのである。[18] また同じ一九一〇年に、五人以上の労働者を雇用した中型企業のうち、六、四一一はマジャール人とドイツ人に制されており、それ以外のものの手中にあった工業会社はわずか三六八にすぎず、そのうち二〇三はスロヴァキア人のものであった。そのスロヴァキア地域でも、地方市場向けの生産を行なう小工場を別にすれば、スロヴァキア人のブルジョアジーに制御されていたのは、全株式会社中わずか一一にすぎなかったのである。なお、比較的重要ないくつかの企業のなかにチェコ人の資本がはじめて姿を現わしたことも、付け加えておく必要がある。トランシルヴァニアでは、工業関係の企業に投下された資本のうち、ルーマニア人の資本はわずか二・九％にとどまっていた。

そこで次に、非マジャール系諸民族の地域の大部分で資本主義的発展がこのように緩慢なまた不揃いな経過をたどったことの理由を問わなくてはならない。こうした地方差の歴史的な根は、遠く封建制の時代に遡るものであって、当時すでに、マジャール人の居住した中央の大平原と非マジャール人の居住した辺境とは、生産構造・定住構造・社会構造のうえで違った姿をみせており、資本主義的発展の萌芽も、さまざまな地域でそれぞれ違った規模で展開された。しかも一八四八～四九年の革命に伴う社会的変革（以後これをブルジョア革命とよぶ）は、この差異を除去しな

かったばかりか、ある程度高めさえした。封建制の廃棄と資本主義的諸関係の導入は、ハプスブルク帝国全体のなかで上からまた中央から行なわれたために、個々の地域や民族の特殊な実情や要求は顧慮されず、何よりもまず支配的諸民族、とりわけその支配階級である大地主と大資本家の利益が念頭におかれ、経済と政治における彼らの指導的役割の確保が重視された。

ブルジョア革命が非マジャール系諸民族にもたらした大きなプラスは、民族的な土地所有をつくり出し、土地持ちの自由農民をつくり出したことであった。なぜなら、彼らこそ民族資本蓄積の、したがって民族ブルジョアジー発生の基礎をなしたからである。しかしブルジョア的改革は、封建制から受け継がれた土地所有の配置や、非マジャール人地域にあるマジャール人大土地所有の経済的地位には手をふれなかったために、このプラスは大いに減殺され、スラヴ人およびルーマニア人の農民は、彼ら自身の地域で、土地の比較的小部分――平均して約四〇％――を自由に所有しえたにすぎなかったのである。大・中の土地所有は、マジャール人地域と非マジャール人地域でほぼ同じ大きさをしめていたが、その経済的役割は非常に違っていた。マジャール人地域と南部ハンガリーでは、大土地所有は資本主義的発展の「プロイセン型」コースをたどり、農民の最上層にもある程度刺激的な作用を及ぼしたが、他の非マジャール人地域では、大地主はなんら資本主義的な商品生産＝耕作を行なうことができなかった。彼らの所有地は大部分森林から成り、その資本主義的な利用が比較的大がかりに始まったのは、ようやく世紀転換時のことであったから、ここでは、マジャール人の大地主は、資本主義的な農業発展の担い手ではなかったのである。のみならず、マジャール人の大地主には有利な、しかし農民には不利な、森林や牧場の分割と耕地整理が行なわれたことは、スラヴ人およびルーマニア人農民の資本主義的発展を特にまひさせるはたらきをした。これによって、農民の牧場利用は決定的に減らされ、広範囲な牧畜の可能性は制限されてしまった。

マジャール人地域と非マジャール人地域の間のこのような自然的・経済地理的な所与条件の差が、ハプスブルク帝国の経済構造、すなわち国内市場における両部の分業関係および二重主義体制の経済的基礎（二重帝国の統一関税地域）とたがいに作用を及ぼしあって、実際に、非マジャール人地域の大部分で、資本主義的発展の著しい遅れを引きおこしたのである。

二重主義体制の経済的基礎は、何よりもまず、マジャール人地域および南部地域の小麦栽培農業の資本主義的発展に好都合であったが[19]、小麦の栽培を行なっていない諸地域には、この便宜はなかった。一八六〇～七〇年代の異常な小麦景気とそれに続く一八八〇～九〇年代の穀物危機は、南部ハンガリーを含むマジャール人農業の資本主義的発展を推進したけれども、小麦をほとんど栽培しなかった諸民族地域の農業は、緩慢な発展を続けたにすぎなかった。他方諸民族の居住地域では、マジャール人地域に比較して、工業の発展に必要な原料やエネルギーはるか広範囲に与えられていたし、工業活動に必要な技術的知識や熟練もマジャール人地域より大量に存在したが、実際には、工業の資本主義的発展は、それほどの規模で現われなかった[20]。その際にも決定的な役割を果たしたのは、二重主義体制の経済的基礎であり、オーストリアはそれによって、自国の工業商品と資本輸出のハンガリー市場における独占的地位を確保し、その代わりに、マジャール人の大・中土地所有の穀物に自国の工業的諸州の市場を開いたのである。それゆえ二重主義の経済的基礎は、少なくとも農業にかんしては、マジャール人地域および南部地方の資本主義的発展に、とりわけ支配民族の経済に好都合であったが、非マジャール人地域の大部分では、工業の発展を妨げるというマイナスのはたらきだけしか現わさなかった。

この点をさらに詳しく検討しよう。ハンガリーの非マジャール人諸地域で経済的発展がおくれたのは、それらの地域の歴史的・地理的な特殊事情によるところが大きかった。この国の西部と中央部（マジャール人地域）は、東部諸

地方（非マジャール人地域）よりもすぐれた交通機関をもち、オーストリアその他の市場に近く、オーストリアの影響をはるかに受けやすかった。[21] 非マジャール系諸地方にも、豊富な原料のような、自己の工業化に有利な条件がなくはなかったが、それも、西部地方の保持する諸利点に十分匹敵するものではなかった。工業化には原料と市場の双方が必要であり、その点スロヴァキアやバナートでは、有利な市場と十分な原料供給があったために、工業発展のおくれについての不平はなかったが、ルーマニア人・ルテニア人・クロアティア人の居住地域[22]のように、必要条件をともに欠いていたところでは、工業生産額は、比較的低いハンガリー全体の平均額をもはるかに下まわったのである。少数民族居住地域のあるものは、原料には恵まれていたが、中央部のマジャール人居住地域に工業が確立されたのちにも、ながく工業化されぬ状態が続き、中央部の工場に対する原料供給地となっていた。マジャール人の居住地域では、産業革命は一八八〇年代に始まり、第一次大戦まで続いたが、東部地域では、工業化の始まりはようやく二十世紀への転換時にさかのぼりうるにすぎない。たとえば、下カルパティア地方（カルパティア山脈の南側）は膨大な森林資源をもっていたが、ここでの工業化はほとんど木材採取の段階（＝林業）を越えず、六〇万の住民のうち製造工業に雇用されていたのは、わずか五、〇〇〇人で、その大部分は木材工業ではたらいていた。[23] しかも木材のほとんどすべては、他のどこかに輸送されて完成品に変えられたのである。

クロアティア人やルーマニア人の居住地域でも事情は大して変わらなかったが、[24] ただスロヴァキアにおける工業発展の割合は、これらの地域とは著しく異なり、一九一三年には、ハンガリーの全工業施設の一七・四％にあたる八一七の工場をもち、この国の全工業生産高の一八・六％は、スロヴァキア人居住地域にある工業会社の手で生産され、とりわけ鉄は二七％、紙は五四％、織物は三四％という大きな割合をしめていた。[25] 鉄と紙のこのような高度の生産は、この地域で利用できた豊富な原料資源に起因するものであり、織物製造の高い割合は、そこになお存在していた

多くの小規模な手芸工業や農家工業によるものであった。とはいえ、スロヴァキアの主要な製造工業関係の企業は大部分オーストリアおよびマジャール人の工業家に制御されていたし、比較的小さな企業の大多数もマジャール人資本に資金をあおいでいたのである。

このように、ハプスブルク帝国の二重主義的構成とそこから生じた経済的諸結果は、自然的所与条件および歴史的前提と相互に影響を及ぼしあいながら、諸民族の地域における資本主義的発展を不均等なものにし、著しい水準の差をもたらした。さまざまな地理的条件、歴史的発展、経済的要因がある程度まで工業発展の地域的不均等を生みだすことは、一般的な現象であるが、ハンガリーで特に注目されるのは、これらの地域的不平等が国内の民族的矛盾を強調し、工業化にみられる格差が非マジャール人地域に民族的反感を生んで、ナショナリズムを刺激する役割をはたしたことである。もっとも、非マジャール人地域の多くを不利な状態におとしいれたマイナスのはたらきは、遅れた地域に生活しているマジャール人のところでも認められた。それどころか、スロヴァキアおよびトランシルヴァニアのマジャール人中地主＝ジェントリーは、非マジャール人農民よりもはるかに多くその影響をこうむった。またトランシルヴァニアのマジャール人居住地区セクラーラント Szeklerland は[28]、いかなる意味でも、ルーマニア人やザクセンの居住地域より高い経済発展の段階には達していなかった。政府は、セクラーラントの経済的発展、没落しつつあるマジャール人ジェントリーの救済などのスローガンをかかげて、種々の経済政策的活動を行なったが、事態を変えることはできなかった。

この関連で、次の問題に目をとめる必要がある。アウスグライヒ後のハンガリーで、マジャール人の支配階級がその絶対的優位を維持するために他の諸民族に強い圧迫を加えたことは、周知の事実であるが、このような民族的抑圧は、マジャール人地域と非マジャール人地域の間の水準の差の発生にあたって、どのような役割を果たしたであろう

か。スラヴ人およびルーマニア人地域にとって客観的に不利な経済発展の傾向は、マジャール人の意図的な民族主義的経済政策によって一段と強められたのであろうか。

ハンガリー政府の経済政策は、本質的には自由主義政策であり、なかんずく二重帝国時代の最初の二十五年間はそうであった。そしてこの政策は、当然まずマジャール人支配階級の資本主義的発展に適合した。なぜなら、彼らは非マジャール系諸民族に対する経済的自由競争において、異常にめぐまれた状況から出発できたからである。とはいえ、一八九〇年以前には、マジャール人の民族政策のうちに、明らかに非マジャール系諸民族の経済発展を妨げることを目ざした経済的措置をみいだすことはできない。しかし、その後十九世紀末に諸民族の民族運動が躍進をみせ、この躍進が彼らの経済的・社会的基礎の強化、とりわけ銀行網の完成と密接な関係をもつことが明らかになると、マジャール人の民族主義的世論は、次第に声高く、非マジャール系諸民族の経済活動の制限を要求するようになった。

一九〇二年にハンガリー政府は、「諸民族の金融機関の政治的かけ引きを妨げるための」活動をはじめた。それにもかかわらず当時の商務大臣は「民族運動の経済的側面は最も危険なものであり」、とりわけ諸民族の金融機関のネットと協同組合の伸張は「ハンガリーの国家理念」にとって危険であるとしながらも、「政府はこんにち、このような発展傾向に対して、意のままに使える有効な手段をほとんどもち合わせていない」と述べている。[27] これは、諸民族の経済団体、銀行、その他の諸企業に有効な政治的抑制を加えることを、自由主義的な経済体制が事実上妨げたことを意味すると思われる。自由主義的な商法に検討を加えて、商業的企業をいっそう有効に取締ることのできる団体法 Vereinsgesetz をつくってほしいという提案も現われたが、[28] 実際にはこのような法律は成立しなかった。それは、何よりもまず、民族的な観点からは不都合な自由主義的経済体制を維持することが、マジャール人大資本家の第一の利益だったからである。諸民族の信用機関を制御しようとするさまざまな試みも、ほとんど実質的な成果をあげるに至らなかった。

しかし、同時にまた次の点を見のがしてはならない。経済的に遅れたスロヴァキア人・ルテニア人・ルーマニア人・セクラー（マジャール人）の居住する北東部および東部辺境の諸問題は、一八九〇年代にはすでにかなり目立っていたので、経済界・政界の指導者たちも、そこに住む農民の異常な不幸に気がつき、農業の原始的水準、工業発展のほとんど完全な欠如、さまざまな形態の高利の横行、大規模な国外移住などを認めざるをえなかった。そこで経済専門の大臣たちは、社会的緊張が公然と爆発するかもしれぬ不安にかられて、みずからそこに介入し、表面的にもせよ、極端にひどい現象に対処せざるをえなくなった。このいわゆる「山地活動」[20] Bergland-Aktion はまずルテニア地域に拡がり、信用協同組合や国家的な土地賃貸制の創設により、また山地の農業や牧畜の技術的水準を高めることによって、非マジャール人の居住する辺境の経済発展を促進し、農民の窮状の深化を阻止しようとした。しかしこの活動は、最初に予定された規模で展開されず、期待された成果をもたらすこともなく、最後には完全に挫折したが、その際決定的な役割を果たしたのは、二十世紀初頭のセール Széll、クーエン・ヘーデルヴァーリ Khuen-Héderváry およびティサ Tisza 政府が示した、非マジャール人地域の経済的・社会的諸問題に対する狭量な民族主義的態度であった。

一九〇三年に政府は、次のような立場を主張した。「ハンガリー民族国家の創出を考慮すれば」、非マジャール人農民の大規模な移住はむしろ好都合な現象であり、この現象の「自然的基礎」を、すなわち農業の停滞、工業と信用の欠如、相対的な人口過剰、一般に「北部ハンガリーにおける困難な、ところどころでは破局的な経済事情」を除去することは、重大な誤りである。この立場に立って首相は、「手近かな悪」すなわち国外移住や諸民族地域の「巨大な不幸」だけをみて、「一般的な視点を考慮してはじめて認められる遠い善」を知らない政策を、否定した。「遠い善」とは、マジャール人の民勢的地位の相対的改善のことであり、「この移住は本質的には、非マジャール系の自国語を話

す住民の退去である」と考えられた。それゆえ「わたしは移住者たちの行動を次のように指導する。マジャール人はできるだけ多く帰国してほしいが、反対に非マジャール系の自国語を話す人々とりわけスラヴ人は、一たびこの国を離れたならば、国外に留まるべきであり、もしくはアメリカのアングロ＝サクソン人と同化してほしい」[30]。この近視眼的な民族主義政策は、農林省と商務省が提案し開始したところの、諸民族地域の経済状態の改善に役立つような活動や措置を、いっさい否認するものであり、経済活動は、諸民族地域の経済一般の躍進に向けらるべきではなく、もっぱら「その地のマジャール人ジェントリーの救済」に向けらるべきものだったのである[31]。

非マジャール系諸民族の資本主義的発展とある程度の経済的強化を、われわれは制限したり妨げたりすることはできないが、しかしまた彼らに援助を与えるべきではないし、国家的な手段で彼らを支持すべきでもない。われわれは経済過程の「自然の」傾向に自由な展開を与えなければならないのであって、これは何よりもまずマジャール人の「民族的」政策に合致するものである。――これこそ、民族主義的でショーヴィニスティックなハンガリー政府が自由主義的経済体制の枠内で取ることのできた、最も幅の広い立場であった。

以上の考察を要約すれば、次のようになろう。非マジャール系諸民族の経済発展を妨げた諸要因を問題にするとき、われわれはたしかに、マジャール人支配階級の経済的・政治的優越が、また封建制に帰因する彼らの地位がその際大きな役割を果たしたことを、否定することはできない。しかしながら、この国のさまざまな地域の経済発展に現われた水準の差は、何よりもまず経済的諸要因の結果として、二重帝国の資本主義的発展の影響下に生じたものであり、この過程では、階級支配や階級政策といった要因の方が、民族的政策の契機よりもはるかに大きな役割を演じた。民族的政策は、王国の所与の経済構造、政治構造の内部で、経済発展の作用する方向をいくらか修正し、強化し、もしくは弱めることはできたが、それを基本線からそらせたり、また基本的方向を逆転させたりすることはできなか

ったのである。

(1) 本稿で使用する統計的数字の大部分の典拠は、Volkszählung der Ländern der Ungarischen Heiligen Krone vom Jahre 1900 und 1910 であり、その材料は、Magyar Statisztikai Közlemények. Új sorozat (Ungarische Statistische Mitteilungen. Neue Folge) に含まれている。カトウシュその他、最近のハンガリーの学者たちも、これを大いに活用している。Katus, op. cit., S. 156, 215 参照。

(2) ただし、クロアティア＝スラヴォニアは、ここでは除外する。カトウシュは、ハンガリー全域をいくつかの民族的地域に分けている。それは、一九〇〇年の国勢調査にもとづいて、ある民族が――雑多な民族が住む県では、非マジャール系の自国語をもつ住民を総計して――絶対多数を形成する（＝少なくとも人口の五〇％をしめる）諸県をまとめるというやり方で、確定されたものである。この民族的地域は、個々の民族の定住地域と必ずしも正確に重なり合わないが、同時代の統計的調査の経済的・社会的な記載で県よりも小さな単位にかんするものが入手できなかったため、このようなやり方で進むほかなかった、とカトウシュは説明している。次に、それらの地域の詳細を列挙しておこう。本稿の分類も、基本的にはこの分類に依存している。L. Katus, "Über die wirtschaftlichen und gesellschaftlichen Grundlagen der Nationalitätenfrage in Ungarn vor dem ersten Weltkrieg," in Die nationale Frage in der österreichisch-ungarischen Monarchie 1900—1918, Budapest 1966, S. 188 ff. なお本章以下の考察は、全体として、カトウシュの研究に多くを負うている。

〔I〕 非マジャール人が多数をしめる地域――三三の県と八つの都市。総計一四四、五七五平方キロメートル、この国の全面積の五一・二％。ここにはハンガリー人口の四五・七％にあたる七、六六一、〇〇〇人が生活していた。

この地域には、マジャール人は一八・五％しか生活していなかったが、それに反して、非マジャール系の言葉を使う人口は七四％にのぼった（ドイツ人の六五％、スロヴァキア人の七四％、ルーマニア人の八三％、ルテニア人の八九％、セルビア人の九三％、クロアティア人の二四％が含まれた）。非マジャール人が多数をしめるこの地域は、次の諸地方に区分される。

非マジャール系民族総計	六、〇三三、〇〇〇	七八・七％
ドイツ人	一、二九三、〇〇〇	一六・八％
スロヴァキア人	一、四七八、〇〇〇	一九・三％

ルーマニア人	二、三〇二、〇〇〇	三〇・二%
ルテニア人	三七八、〇〇〇	四・九%
クロアティア人	四六、〇〇〇	〇・六%
セルビア人	四〇七、〇〇〇	五・三%
その他	一二九、〇〇〇	一・六%
マジャール人	一、六二八、〇〇〇	二一・三%

1　スロヴァキア人が多数をしめた北部ハンガリー地域――Árva, Bars, Liptó, Nyitra, Pozsony, Sáros, Szepes, Trencsén, Turóc, Zólyom の諸県と、Pozsony (Bratislava) およびSelmecbánya (Banská Štiavnica) の諸都市。三三、四六二平方キロメートル、この国の全面積の一一・五%。ここには一、九五六、〇〇〇の住民が生活していたが、これはこの国の人口の一一・七%にあたる。内訳は一、三七二、〇〇〇人がスロヴァキア人（七〇%）、三三二、〇〇〇人がマジャール人（一六・四%）、一八九、〇〇〇人がドイツ人（九・七%）、四八、〇〇〇人がルテニア人（二・四%）であった。この地域にはスロヴァキア人の六九%が生活していた。

2　非マジャール系諸民族が混合しながら多数をしめた南部ハンガリー地域――Bács-Bodrog, Temes および Torontál の諸県と、Pancsova (Pančevo), Temesvár (Timişoara), Újvidék (Novi Sad), Versec (Vršac), Zombor (Sombor) の諸都市。二六、七八九平方キロメートル、この国の全面積の九・五%で、一、七四八、〇〇〇の住民をもち、この国の全人口の一〇・四%にあたる。そのうち四三八、〇〇〇人がマジャール人（二五%）、一、三二〇、〇〇〇人が非マジャール人（七五%）で、内訳は五四四、〇〇〇人がドイツ人（三一%）、四五三、〇〇〇人が南スラヴ人（二五・八%）、二五六、〇〇〇人がルーマニア人（一四・六%）、四八、〇〇〇人がスロヴァキア人（二・七%）であった。ここにはセルビア人の九〇%とドイツ人の二七%が生活していた。

3　ドイツ人とクロアティア人が多数をしめた西部ハンガリー地域（Dunántúl より西の国境に近い地方）――Moson と Sopron の二県と Sopron 市を含む。五、二五六平方キロメートル（一・九%）で、三七〇、〇〇〇人の住民をもち（二・二%）、そのうち一六四、〇〇〇人はドイツ人（四四・五%）、三九、〇〇〇人はクロアティア人（一〇・五%）、一六三、〇〇〇人はマジ

ャール人（四四％）であった。

4　ルテニア人が多数をしめた地域――Berg, Máramaros, Ugocsa, Ung の諸県。一七、九四一平方キロメートル（六・三％）で、七五五、〇〇〇人の住民をもち（四・五％）、そのうち三三八、〇〇〇人はルテニア人（四三・五％）、八四、〇〇〇人はルーマニア人（一一・一％）、七八、〇〇〇人はドイツ人（一〇・三％）、四五、〇〇〇人はスロヴァキア人（六％）、そして二一七、〇〇〇人はマジャール人（二八・七％）であった。ルテニア人は比較多数をしめたにすぎなかったが、それにもかかわらず、これら四県をルテニア人の地域とみなすことができる。なぜなら、ここにはルテニア人の七七％が生活していたからである。

5　東部ハンガリーおよびトランシルヴァニアの、ルーマニア人が多数を占めた地域――Alsó-Fehér, Arad, Beszterce-Naszód, Fogaras, Hunyad, Kolozs, Szeben, Krassó-Szörény, Szrlágy, Szolnok-Doboka, Torda-Aranyos の諸県を含む。五五、五七七平方キロメートルで、二、四七八、〇〇〇の住民をもち（一四・八％）、そのうち一、八一〇、〇〇〇人はルーマニア人（七三％）、二〇八、〇〇〇人はドイツ人（八・四％）、そしてマジャール人は四〇一、〇〇〇人（一六・二％）であった。ここには、ハンガリー内のルーマニア人の六五％が生活していた。

6　ルーマニア人とザクセン人が多数をしめたトランシルヴァニアの地域――Brassó, Kis-Küküllő, Nagy-Küküllő の諸県を含む。六、五五〇平方キロ（二・三％）で、三五〇、〇〇〇人の住民をもち（二・一％）、そのうち一五一、〇〇〇人はルーマニア人（四三・二％）、一一〇、〇〇〇人はドイツ人（ザクセン人、三一・三％）、八一、〇〇〇人はマジャール人（二三・〇％）であった。それゆえ非マジャール語を自国語とする住民は、七七％という絶対多数をなしていた。

〔Ⅱ〕　マジャール人が多数をしめた中央の地域（ハンガリー大平原 Alföld およびドナウ川以西 Dunántúl 地方）――三〇の県と首都ブダペストをはじめ一六の都市を含む。全体で一三八、二七五平キロメートルで、この国の全面積の四八・八％にあたり、一九〇〇年には、ハンガリー人口の五四・三％にあたる九、一七三、〇〇〇人が居住していた。この地域には、マジャール語を自国語とする住民の八一・五％、非マジャール人の二六％（ドイツ人の三五％、スロヴァキア人の二六％、クロアティア人の七六％）が生活していた。

マジャール人	七、〇二一、〇〇〇	七七・〇％
非マジャール人	二、一五二、〇〇〇	二三・〇％
ドイツ人	七〇四、〇〇〇	七・七％

スロヴァキア人	五一四、〇〇〇	五・七%
ルーマニア人	四九七、〇〇〇	五・六%
ルテニア人	四七、〇〇〇	〇・五%
クロアティア人	一四五、〇〇〇	一・六%
セルビア人	三一、〇〇〇	〇・三%
その他	一〇四、〇〇〇	一・一%

(3) Katus, op. cit., S. 157.

(4) Magyar Statisztikai Közlemények. Új sorozat. Bd. 27, 64 ; Katus, S. 157, 202.

(5) 一九〇四年の選挙権の統計による。Gy. Rácz ; Társadalmunk osztálytagozódása és a magyar demokrácia kialakulásánk útjai (Die Klassengliederung unserer Gesellschaft und die Wege der Entstehung der ungarischen Demokratie), Budapest 1909, S. 8 f. ; Katus, op. cit., S. 215.

(6) ここでマジャール人の資本家という場合には、マジャール化したユダヤ人、ハンガリーの資本主義的発展の主力となった同化したユダヤ資本家を当然含んでいる。以下すべて同様である。

(7) Katus, op. cit., S. 159.

(8) Magyar Statisztikai Közlemények, Új sorozat, Bd. 35 ; Magyar Statisztikai Évkönyv (Ungarisches Statistisches Jahrbuch) 1901, 1914 ; Katus, op. cit., S. 159, 198, 201.

(9) Katus, op. cit., S. 160.

(10) ハンガリーの国外移民については、前章を参照されたい。また Macartney, op. cit., 702 f. ; Barany, op. cit., 257 f. 参照。

(11) A magyar szent korona országainak kivándorlása, és visszavándorlása 1899—1913 (Auswanderung und Rückwanderung der Länder der Ungarischen Heiligen Krone, 1899—1913), Budapest 1918. Magyar Statisztikai Közlemények. Új sorozat, Bd. 67 ; Katus, op. cit.

(12) Tibor Kolossa, "Statistische Untersuchung der sozialen Lage der Agrarbevölkerung in der Ländern der österreichisch-ungarischen Monarchie" in Die Agrarfrage der österreichisch-ungarischen Monarchie, Bucharest 1965, S. 153.

(13) Berend and Ránki, op. cit., p. 178.

(14) Stefan Pascu, Constantin C. Giurescu, Josif Kovács u. Ludvic Vajda, "Einige Fragen der landwirtschaftlichen Entwicklung in der österreichisch-ungarischen Monarchie," in Die Agrarfrage der österreichisch-ungarischen Monarchie, S. 14ff.

(15) Pascu et al., op. cit., S. 19. なお、マジャール人と非マジャール系諸民族の間に土地所有にかんして大きな格差があり、非マジャール人農民に十分な土地が欠けていたことは、スロヴァキア人、ルーマニア人、セルビア人、ルテニア人農民の間に反マジャール的民族感情を生み出す主要な経済的要因となった点が、特に注目される。所有の不均衡から生ずる貧困と、それに由来する社会的緊張や反目は、もとより少数民族の居住地域に限られたわけではなく、ハンガリー全土に拡がっていった。一方の側の富裕な地主と、他方の側の、かつての農奴で土地をもたない農場労働者、同じく土地のない移住性の農業労働者、そして最後に、大所有地と競争しえない農民、もしくは自己の小さな土地でかろうじて生計を立てる貧しい農民との間の衝突で、ハンガリー全国は大きく揺さぶられた。裕福な地主と貧しい農業プロレタリアートの対立は、少数民族の居住地域よりも、マジャール人地域においていっそう激しいことさえあった。しかし、マジャール人の農業地域でおこった貧富の間の社会的衝突は、どこまでもマジャール人内部の争いであったが、マジャール人が広大な土地を所有した非マジャール人地域での社会的反目は、民族的反目となる傾向を含んでおり、この衝突は、民族的感情を強め、やがて二重帝国の将来を左右する重大な民族的対立に発展する可能性をもっていたのである。

(16) Kolossa, op. cit., S. 16 f.

(17) 歴史家たちはしばしば、ハプスブルク王国内に住んでいたルーマニア人、セルビア人、クロアティア人は、彼らの母国に居住した同胞よりもいっそう進んだ経済の祝福を享受していたことを指摘している。これは事実であるにしても、それは、彼らの社会的条件が彼らを不満にするほど悪かったことを否定するものではない。土地と富の不均等な分配のために、非ドイツ系および非マジャール系農民の経済状態は、ドイツ人やマジャール人農民のそれよりもはるかに劣悪であり、そのために、また彼らがドイツ人およびマジャール人に政治的に抑圧されたことのために、他の民族集団に属する農民たちはつねに不満をもち、彼らの社会的不満は、時おり民族的論争の形をとったのである。Ránki, "Comments", p. 68.

(18) Katus, op. cit., S. 160.

(19) 小麦ブームについては、Macartney, op. cit., p. 706 参照。

(20) Berend and Ránki, "Economic Factors," p. 181.

(21) ibid.

(22) 自治地区クロアティアは、本稿では一応考察の外におかれているが、ここで比較のために、その実情をみておこう。クロアティアでも、工業化はそれほど進んでいなかった。そこには、ハンガリー全人口の一二・五%が住んでいたが、工業に雇用されていたのは、ハンガリーの工業労働者の六・一%にすぎず、またハンガリーの馬力容量全体のわずか五%が利用されていたにすぎなかった。クロアティアの工業生産総額は、全ハンガリーの工業生産高の五%に達した程度であり、しかもクロアティアの工業は、――地方市場向けの品物をつくる二、三の小事業を別にすれば――主として食品加工業に限られていた。さらにこれらの工業さえも、全国的な規模での市場の需要に応ずるために設けられたものではなく、主要な小麦粉製造工場はすべてブダペストに移っていた。

(23) Berend and Ránki, op. cit., p. 182.

(24) ルーマニア人の居住地域は、クロアティアよりわずかに事情がよい程度で、そこにはハンガリー全人口の一四・九%が含まれていたが、この地域ではたらく工業労働者の数は、工業労働者全体の九・五%にしかあたらなかった。

(25) Berend and Ránki, op. cit. 一九一三年には、スロヴァキアの人口はハンガリー全人口の一六・八%であったが、スロヴァキアの工場には一〇万の労働者が雇用されており、これはハンガリーの工業労働力の二〇%近くにあたっていた。

(26) セクターについては、拙稿「ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題」『スラヴ研究』二〇、一九七五年、五二ページ参照。

(27) Katus, op. cit., S. 164.

(28) S. Országos Levéltár (Ungarisches Staatsarchiv, 以下 OL と略記する)、A Miniszterelnökség Levéltára (Archiv des Ministerpräsidiums, 以下 ML と略記する) 1904-XIV-Nr. 741 ; Katus, op. cit.

(29) 北部、北東部から東部にかけての非マジャール人地域は大体において山地であったから、このようによばれた。

(30) Katus, op. cit., S. 166.

(31) ML 1904-XIV-Nr. 741 ; 1910-XV-Nr. 2164. ; Katus, op. cit., S. 206.

一八　非マジャール系諸民族の社会構造

もう一度議論の本筋に帰ろう。すでにみたように、非マジャール系諸民族の経済発展はもろもろの要因に妨げられて、マジャール人やドイツ人のそれに比してはなはだ遅れていた。しかしそれにもかかわらず、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、非マジャール人地域なかんずくその第一グループは、不利な状況下にありながら、資本主義的発展においてかなりの飛躍をみせ、マジャール人の「民族的」政策もそれを妨げることはできなかった。世紀転換のころ促進された経済的発展は、まず第一にマジャール人支配階級の――とりわけマジャール人金融資本の――地位を強化したけれども、第二に、非マジャール系諸民族のサークル内で資本の蓄積を促進し、諸民族のブルジョアジーをある程度強化し、彼らの経済的・政治的活動力を高めるに至った。本章では、このような民族ブルジョアジーに焦点をおきながら、前章でみたハンガリーの特殊な資本主義的発展の結果が、非マジャール系諸民族の社会構造のなかにどのように現われているかを、検討することにする。

世紀転換の時点で、非マジャール系諸民族の社会構造は、マジャール人のそれとは本質的に違った姿を示していた。まず第一に、非マジャール系諸民族の社会は、内部に封建的残滓の重荷を負わされていなかった点が特徴的であり、その限りではマジャール人より有利であった。彼らの社会生活・政治生活のなかにも封建的起源をもつある種の要因が存在しないわけではなかったが、それらは、ブルジョア革命後の数十年間に次第に隔離され廃棄されて、社会的・政治的な重みを失なってしまったのである。しかしその反面、非マジャール系諸民族の社会構造はブルジョア的見地からすれば未発達であるか、もしくは一面的な発展にとどまっていた。ブルジョアジーは完全に欠けていたか、もしくはその緩慢な発生のゆえに、なお弱体であった。社会構造のなかで優勢だったのは、それとは別種のものであ

り、大部分の社会層はその傾向と可能性においてブルジョア的だったにすぎず、実際の経済的・社会的地位と機能においてはブルジョア的ではなかった。

ハンガリーの非マジャール系諸民族は、その社会構造に従って三つのグループに分けられるが、この分類は、資本主義的発展の経過のうちに現われた地域的差異と正確に一致する。第一のグループに属するのはドイツ人で、彼らは資本主義的発展のうえで指導的役割を果たし、その社会構造はマジャール人よりも高度のブルジョア化を示していたが、その指導的階層は、急テンポでマジャール人の社会と民族性に同化していった。ドイツ人の社会は、その特殊な定住状態、その経済的・政治的立場、その異常な構造によってスラヴ人やルーマニア人の社会とははっきり区切られていた。第二のグループはスロヴァキア人とセルビア人で、彼らは、資本主義的発展のある種の部門に——南部ハンガリーは資本主義的農業に、北部ハンガリー（スロヴァキア）は大工業に——早くから強くまきこまれた地域に、生活していた。もっともこのような発展から主要な利益を得ていたのは、マジャール人とドイツ人の支配階級であったが、スロヴァキア人やセルビア人の間にも若干のブルジョア化はみられた。第三グループはルーマニア人とルテニア人で、彼らは、資本主義的発展の影響をうけること最も少なく経済発展の最低段階にある地域に生活していたために、社会構造のなかにブルジョア化の徴候の現われることも、最も少なかった。ドナウ川以西の南西部国境付近に住むごく少数のスロヴェニア人の社会も、このグループに入れてよい。以下ここでは、第二、第三グループを中心に考察を進めることにする。

まず第一に注目されるのは、非マジャール人社会の、なかんずく第三グループにおける、農業的性格である。そこでは住民の大多数——第二グループでは四四～五五％、第三グループでは六〇～七〇％——は、なお未分化の農民から成っていた。[1] ただ南部地域のセルビア人の間では、農民のブルジョア化と分解はすでにかなり進んだ段階にあり、

顕著な農民ブルジョアジーと多数の農業プロレタリアートが発生して、中・小農民層に対して優位を占めていた。その他の非マジャール系諸民族のところでは、農民の内部に鋭い階級的境界線が生まれることはなかったが、ただ一体としての農民集団から脱落してゆく下層民がプロレタリアートをつくり出し、それは社会全体の¼ないし⅓を成していた。しかしその大部分は農業プロレタリアと半プロレタリアであり、(2) 注目に値する工業労働者が発生したのはスロヴァキア人のところだけで、セルビア人・ルーマニア人・ルテニア人のところでは、幅の広い農業プロレタリアート層が社会構造の最下部をしめていた。スラヴ人およびルーマニア人のところで農民が社会的に重要な力であったことは、彼らが数のうえで大きな割合をしめたばかりでなく、民族資本を蓄積しブルジョア化を進めるための主要な源泉が農民の土地所有のうちに、とりわけ、世紀転換のころ比較的広範囲に現われた農民の商品生産のうちにあったという事情からも、説明される。

非マジャール人社会のいま一つの特徴は、それがなんら重要な大地主階級や大ブルジョアジーをもたなかったこと、いいかえれば、民族社会の枠内ではブルジョア社会の支配的な階級がつくり出されなかったことである。非マジャール人住民が多数をしめた地域でも、支配階級はマジャール語ないしドイツ語を自国語とする大地主および大資本家であった。さきにふれたように、非マジャール人の大地主や土地所有貴族の大部分は、封建制下にすでにマジャール人の支配階級に同化されており、その結果、ブルジョア革命後の時期には、非マジャール系諸民族の民族的な社会生活・政治生活から決定的に引き離されてしまったのである。他方非マジャール系諸民族のミドルクラスのいかなるグループも、支配階級のレベル以上に自己を高めることはできなかった。民族ブルジョアジーは非マジャール人社会の上層であり、民族運動の指導者であったけれども、真の大資本家的支配階級への発展は、一方では彼ら自身の経済的基礎のせまさと弱さによって、他方ではオーストリア＝ハンガリー金融資本の支配的地位によって妨げられた。セルビ

ア人の大商人や大借地人、ルーマニア人とスロヴァキア人の銀行ブルジョアジー、スロヴァキア人の工業ブルジョアジーも、全国との関係でいえば、せいぜいブルジョア的ミドルクラスの上層、すなわち中位ブルジョアジーにすぎなかったのである。

この点をいっそう明らかにするために、非マジャール人地域の民族ブルジョアジーの成立過程とその性格・役割をまとめてみておこう。一八四八年前ハンガリーでは、多数の非マジャール系諸民族の間で、封建的状況下に商品生産や商品輸送が行なわれるようになっていたが、それらの地域では、まず大商人の手で、詳しくいえば、セルビア人とクロアティア人の穀物商人や家畜商人、船舶業者、トランシルヴァニア南部のザクセン人およびルーマニア人の近東商人などの手で、それより小規模ながらザクセン人とスロヴァキア人の工業家の手で、かなり顕著な資本の蓄積が行なわれた。これらの商業資本は、経済的な分裂状態のもとで、自己の地域の孤立した地方市場において重要な地位を獲得し、ブルジョア革命前の民族運動において指導的役割を演じた。一八四八年から一八六七年に至る時期には、この商業資本は自己の地位をブルジョア的体制のなかへ無傷のままもちこみ、領土的自治の助けをかりて自己の民族的市場をつくりあげようと、繰り返し努力した。しかし、アウスグライヒとそれに従属した民族問題の解決は、非マジャール人ブルジョアジーの経済的・政治的自治の努力を断ち切ったばかりか、統一的関税地域、産業革命、鉄道建設、二重主義的構造その他の諸要因は、まさに反対の方向に作用し、経済的統合、全王国的市場の創出、オーストリア＝ハンガリーの大資本による独占的支配の実現を促進したのである。この過程は、諸民族のブルジョアジーにとっては重大な打撃であった。比較的せまい地方市場における彼らの指導的役割は、全王国という統一市場の枠内では、次第に縮小し無意味なものになってしまったからである。彼らは、オーストリア＝ハンガリーの大資本と競争することはできず、工業資本家になることもできず、国際貿易における自己の地位も大部分失われてしまった。アウスグライヒののち、彼ら

は自己の残存資本を、比較的小さな信用機関の設立という形でかろうじて救い出した。セルビア人、スロヴァキア人、ルーマニア人の最初の銀行や貯蓄銀行が設けられたのは、このころのことであった。それゆえ諸民族ブルジョアジーの最上層も、中小資本＝中位ブルジョアジーの枠を越えて真の大ブルジョアジーに成長することはできなかったし、彼らはまた、アウスグライヒ後のハンガリーでプロイセン的な道を経て急テンポに進んだ資本主義的発展の受益者にもならなかった。主として大商人から成る民族ブルジョアジーの没落、彼らの発展の行きづまりは、七〇～八〇年代における民族運動の一時的後退のうちにも現われている。

しかしそれにもかかわらず、この国の経済的統合はなお完全ではなく、マジャール人金融資本の支配網は、至るところで一様にしっかり結ばれているわけではなかった。マジャール人の資本主義およびマジャール人の金融ブルジョアジーは、それ自身依存的な状態にあり、その発展は多くの不均衡と一面性を示していた。もちろん彼らは、みずからの生産物による国内市場の独占的支配を望み、少数民族の居住地域でもすべての地方的市場を支配しようとつとめたが、しかしその発展の頂点においてさえ、多民族国家ハンガリーの全地域を自己の経済活動と強力な地位で完全かつ一様に充たすに足るほど強力ではなかった。非マジャール人の居住地域では、彼らはただある種の重要な地位と資本主義経済の上層部――鉱山、大工業経営、大銀行、鉄道など――を自己の手中に収めたにすぎず、そこで活動する会社の大部分は、これらの資本主義的生産部門の外にあり、マジャール人の金融資本によって確保された経済生活の上層部とは直接のつながりをもっていなかった。こうして、マジャール人金融資本の支配的地位およびその経済活動のネットは、非マジャール人居住地域にある種の真空地帯を残しており、ゆるやかな発展をみせはじめていた諸民族の中位ブルジョアジーは、大ブルジョア的支配階級への道や、これらの地域で経済上の重要な地位をかちえる可能性は閉ざされていたけれども、この真空地帯に根をすえて、地方的な経済生活の下層部、すなわち信用組織、農業と工

業の小生産、地方的市場の創出などによって、彼ら自身の地位を拡大・強化することができたのである。そしてこのような非マジャール系新興ブルジョアジーは、当然優勢なマジャール人の支配階級と矛盾・衝突しなければならなかった。

ところで非マジャール人社会のミドルクラスは、幾多の重要な点でマジャール人のミドルクラスとは違っていた。マジャール人ミドルクラスのなかで指導的役割を演じ、その中核をなしたジェントリー的要素は、ここにはほとんど代表されていなかった。非マジャール人社会のミドルクラスは、「支配者 Herrn 的」性格をもつマジャール人ミドルクラスとは反対に、真にブルジョア的な階級であり、以前の商人ブルジョアの残存物、中位ブルジョアジーの段階に上昇した手工業者（職人）や富裕な農民、それに大部分農民や庶民出身の知識階級から成っていた。ミドルクラスの二つの核心をなしたブルジョア的中間層と知識階級のうち、最初はむしろ後者――公証人・大学教授・教師・聖職者――が指導的発言を行なっていたが、その際彼らが主としてよりどころにしたのは、教会や学校などの自治組織であった。しかしながら、一八九〇年代に活況を呈した経済発展は、明白なブルジョア的要素をますます強く前面に押し出した。それはまず第一に銀行ブルジョアジーであり、スロヴァキア人のところでは手工業者のミドルクラスが、またセルビア人のところでは商人のミドルクラスが、これに従った。非マジャール人ミドルクラスの内部構造の変化、旧知識階級に対する中位ブルジョアジーおよびブルジョア的新知識層の進出こそ、世紀転換のころ活発化した資本主義的発展の重要な結果の一つであり、民族運動の新時期を開いた主要な社会的動機だったのである。

次に諸民族の民族ブルジョアジーの発展を具体的に眺めよう。スロヴァキア人・ルーマニア人・セルビア人の金融機関網と協同組合運動の発展は、一八九〇年代に始まったが、それらが真に広範囲に拡がっていったのは、世紀転換後、第一次大戦の勃発に先立つ十年間のことであった。これら三民族の銀行および貯蓄銀行の数は、一八九〇年には約三

〇であったが、一九〇四年には早くも一〇〇を越え、一九一五年には二〇〇以上になった。[8] それらの株式資本は、一八九〇年には四七〇万クローネであったが、一九〇四年にはすでに一、六三〇万クローネになり、一九一五年には五、八三〇万クローネに飛躍した。自己資本と外来資本を含むこれらの銀行の全資本は、一九一五年には三二、二〇〇万クローネになり、その純益は四九〇万クローネに達した。[4] 金融機関の運営に指導的役割を果たしたブルジョアジー――取締役・法律顧問・監査役――の数は、一八九〇～一九〇四年の間に、スロヴァキア人のところでは八五から二七四に、ルーマニア人のところでは一九六から一、〇八三に増大した。[5] スロヴァキア人・ルーマニア人・セルビア人の議員および政治的指導者も、第一次大戦に先立つ十年間には、主として銀行ブルジョアジーのサークルから出ているのである。

しかし、諸民族の金融機関や協同組合がこのように急速な発展をとげ、大きな資本の蓄積をみせたとはいえ、この過程はただ地方的関係のなかで意味をもったにすぎなかった。全国との関連でいえば、非マジャール系諸民族の金融機関は、社会的総資本のささやかな一小部分――その三%にも及ばなかった――を成したにとどまり、マジャール人の指導的な大銀行は、単独で、スラヴ人およびルーマニア人の金融機関を合わせたものよりも大きな資本力を示していた。しかも、非マジャール系諸民族の金融機関は、同じ民族が多数をしめる彼ら自身の地域においてさえ、指導的役割を演じたわけではなく、たとえば、自己の地域のクレジット活動において、スロヴァキア人とルーマニア人の金融機関の分け前は一八～二〇%、セルビア人金融機関の分け前は五～七%に達した程度であった。ただ、ザクセン人の諸銀行は、彼ら自身の地域であるトランシルヴァニアの南部および東部諸県で金融活動の支配権を握っていたが、[6] これを別にすれば、工業資本と銀行資本の結びつき――金融資本の成立の発端――が控え目ながらも見出されるのは、スロヴァキア人においてだけであり、それもチェコ人資本の強力な支援を背景にしたものであった。

非マジャール系諸民族のブルジョア的発展の相対性は、次の事実にも現われている。一九〇四年の職業をもつ成年男子についての統計によれば、五人以上の従業員をもつ大・中の手工業者および工業家のうち、マジャール人とドイツ人は六、四一一人を数えたが、他の言葉を話すものはわずか三六八人――全体の五・七％――にすぎず、その内訳は、スロヴァキア人二〇三名、セルビア＝クロアティア人五九名、ルーマニア人三八名となっている。またスラヴ人とルーマニア人は全国人口の⅔をしめていたのに、商業ブルジョアの上層のうちにはわずか七・一％しか代表されておらず、他方小手工業者と小商人のところでは二〇％をしめていた。小手工業者では、スロヴァキア人の数は、ルーマニア人・ルテニア人・南スラヴ人を合わせたものよりも多かった。(7)

一方では、比較的急速に発展し、民族生活の経済的・政治的指導者の地位を獲得したが、他方では、従属的役割にあまんじ、全国の経済生活に対してはもとより、自民族の居住地域の経済生活に対してさえわずかな関係しかもたなかったというのが、スラヴ人とルーマニア人の銀行の周囲に集まった民族ブルジョアジーの立場の特徴であったが、そのために、非マジャール系諸民族のミドルクラスは、次のような注目すべき性格をもつことになった。彼らは下に向かって開かれており、マジャール人のミドルクラスのように「支配者」社会の下層として、農民や小ブルジョアの上層とかたい分離壁で遮断されてはいなかったのである。大工業の発展から遠ざかり、経済生活の上層部からしめ出された非マジャール人ブルジョアジーにとって、手が届くのは、経済活動の地方的下層部、資本蓄積の原始的で控え目な源泉だけであった。彼らに可能なのは、農民的・手工業的小生産を組織し、それにクレジットを提供し、その交通を発展させ、その利益をくみとり、小資本を集めてそれをなかんずく農業に投資することであった。諸民族の銀行の主要な活動分野は農業であって、彼らは農民や中位地主にクレジットを供給したり、土地の売買や分割を行なったりしたが、町や村の小手工業者や小商人へのクレジット供与にも関係した。（工業の建設に関係したのは、チェコ人

の資本に支援されたスロヴァキア人の銀行だけであった。）これらの銀行は、知識階級（公証人・教師・聖職者）、小市民、農民の大部分を――一部はエージェントや仲介者として、一部はパートナーとして、――自己の経済的勢力範囲のなかに、さらにそれを通じて自己の政治的勢力範囲のなかに、引き入れることができたのである。

諸民族のミドルクラスのいま一つのグループである知識階級も、同じく緊密な直接の糸で、彼ら自身の社会の下層の人々と結びつけられた。彼らはその言葉と民族性のために、国家や公共の職務から事実上しめ出されていたので、これまた自民族の農民的・小ブルジョア的大衆が頼りであり、社会的にも政治的にもこの方向に自己の立場を定めざるをえなかったのである。

こうして非マジャール人の社会では、その民族の中間層と下層の間に分離がおこることはなく、ミドルクラスは十分成熟した資本主義社会の支配階級とはちがって、いわば農民的・小ブルジョア的社会の指導的階層にほかならなかったのである。

（1）Katus, op. cit.,S . 172.

（2）所有地二ホールト以下の零細農で、半ば農業労働者として生計を立てていたものが、半プロレタリアートである。Katus, op. cit., S. 208.

（3）Berend and Ránki, op. cit., S. 184. 特にルーマニア人の銀行資本の急激な増加は、注目に値し、一九一四年までに、ルーマニア人の地域だけで一五〇の銀行が存在した。

（4）Les négociations de la paix hongroise, Ⅲ/A. p. 412―417 ; Verdicus, Die Nationalitätenfrage in Ungarn, Budapest 1909 ; J. Vučković, Srpski kompas 1909 (Serbischer Kompass), Zemun 1909 ; Katus, op. cit., S. 215.

（5）Veridicus, op. cit., S. 14, 26.

（6）Les negociations de la paix hongroise, Ⅲ/B, XVI/A-B, Landkarten.

(7) Gy. Rácz, Társadalmunk osztálytagozódása és a magyar demokrácia kialakulásának utjai (Die Klassengliederung unserer Gesellschaft und die Wege der Entstehung der ungarischen Demokratie), Budapest 1909, S. 8 f.

一九　諸民族の民族運動とその性格

次に、以上のような社会的基礎のうえに展開された非マジャール系諸民族の民族運動の実態とその性格を、考察しなければならない。

十九世紀中葉以後一九一八年に至る時期の民族運動の発展は、大体において次の三つの時期に分けて考えることができる。第一期は、一八六〇年から七〇年代の中ごろまで、いくらかは八〇年代のはじめまで続いた。この時期は、諸民族の自由主義的なブルジョアジーと知識階級が領土的自治をめざし、ハンガリーが多民族国家であることの承認をかちえて国家生活をそれにかなうよう調整するために、活発に戦った時期である。そこでは、当然のことながら、ハプスブルク帝国の二重主義的構造とそれに由来するもろもろの民族的抑圧に対する反抗が、民族闘争の中心的課題であった。しかしながら、七〇年代の後半から八〇年代のはじめにかけて、自由主義的な民族運動は次々に活発な闘争から後退して、政治的な受身の態度におちこみ、ますます強化されるマジャール人ナショナリズムの攻撃に対する防御だけで満足するようになった。これが第二期であり、やがて民族運動の自由主義的指導部は孤立し、その諸政党は瓦解しはじめた。こうした事態が、前章でみた、民族ブルジョアジーの経済的発展の行きづまりの時期と一致していることは、注目される。主として大商人から成る民族ブルジョアジーの没落、彼らの発展の行きづまりは、七〇年代および八〇年代における民族運動の後退のうちに、とりわけ、民族運動を指導したブルジョア層とインテリ層の政治的受動性と彼らの社会的・政治的な孤立化のうちに、現われているのである。世紀転換のころ始まった第三期は、

それに先立つ時期に比較して、非マジャール系諸民族の民族的発展における新時代を意味した。以下の考察は、第三期の民族運動を中心テーマとするものである。

十九世紀末から二〇世紀のはじめにかけて、ハンガリーの非マジャール系諸民族のあらゆる民族運動は、その組織的な枠組と戦術、その綱領と実際活動のうえで、重大な変化を示しはじめた。諸民族の伝統的な政党は解体し、いくつかの分派に割れはじめた。民衆から孤立した、古い保守的＝自由主義的な、また受動的な政治的サークルに変わって、新しい社会状況や考え方を代表する新世代が、民族運動の指導権を引継いだ。以下各民族についてその実情をみよう。(1)

まずスロヴァキア人の間では、マルティン Turóczentmárton (Martin) にあったスロヴァキア民族党の中心部が、一八九〇年末に孤立化し、以後民族運動の指導は、一部は保守的な聖職者派の手に、一部は急進的なブルジョア的知識階級の手に移ったが、後者はチェコ人とスロヴァキア人の統一という綱領をかかげていた。フリンカ Hlinka に率いられた聖職者派は、一八九六年以後マジャール人のカトリック人民党を支持したが、新世紀のはじめに、独立のスロヴァキア人民党を組織した。若いスロヴァキア人の急進的・ブルジョア的知識階級の登場は、ブラホ Blaho とシュロバール Srobár による一八九八年の「声(フラス)」Hlas 紙刊行と結びついていたが、この新聞はマサリク現実主義の精神に培われた民族的・政治的・社会的な綱領(プログラム)をうち出していた。それ以後、右向きの聖職者的人民党とブルジョア＝民主的・急進的な声(フラス)派が、スロヴァキア人の政治生活を指導した。両派は、スロヴァキア人の農民と小ブルジョアを味方にし、奮起させ、かつ組織するための努力をはじめ、かなりの成功を収めたが、フラス派はさらに工・農業プロレタリアートとの連繋をもとめ、社会主義的な労働運動や農民運動をも自己の政治的勢力下におこうとした。

次にルーマニア人のところでも、一八九六～九九年に、アラド Arad の「トリブナ＝ポプルルイ」Tribuna Poporului 紙の周りに結集した分派が、ヘルマンシュタット Hermannstadt にあるルーマニア民族委員会の指導に反対したところから、ルーマニア民族党の危機が始まった。銀行の周りに集まった若いブルジョア的知識階級の率いる分派「行動主義者」Aktivisten がまもなく党の指導を引きうけ、これまたブルジョア＝民主的精神に立ち、経済的・社会政策的活動ならびに大衆との結合という目標をかかげて、自己の政治路線を確立した。

セルビア人のところでは、自由派とトミッチ Tomić の率いる急進派との間に成立していた政治的共同作業と連合は、一八九八年完全に中断され、一九〇二年の会議選挙で急進派が勝利を収めたのちは、彼らがセルビア人の政治と民族的な教会自治の生活を指導した。クロアティア人の間にも民族運動の「新航路」が出現した。国法的反対派の後退、権利党の瓦解、進歩的「現実主義的」な青年知識階級の政治への登場、一九〇三年の「ナロードニ＝ポクレット」"narodni pokret"、それに続くセルビア＝クロアティア連合の設立と勝利などが、この「新航路」の特徴であった。

トランシルヴァニアのザクセン人の間でも、一八九三年にコロディ Korodi とルルツ Lurtz の率いる若いブルジョア的知識階級――「緑衣派」die Grünen――が、急進的な民族的・社会的綱領をかかげて姿を現わし、ザクセン人民党の保守的・譲歩的な指導に徐々に反対し、最後には完全にこれと絶縁した。大ドイツ民族主義を目ざす新しいザクセン人の政治指導に支持されて、南部ハンガリーにもドイツ人の民族運動が発生したが、一九〇〇年から一九〇三年にかけてクラマー Cramer とコルン Korn による新聞活動が行なわれ、次いで一九〇六年にドイツ＝ハンガリー人民党が設立されて、この運動は頂点に達した。

政治指導、政治組織、政党の枠組に現われたこのような変化と並んで、民族運動は、カールマーン＝ティサの時代に一般化していた政治的な受身の態度に別れを告げ、一九〇一年にはスロヴァキア人が、一九〇三年と一九〇五年に

はルーマニア人がふたたび政治活動の舞台に登場し、議会選挙に参加した。個々の民族運動の間の結びつきも増し、広範囲な政治的共同作業にまで発展した。その主要なものとしては、一八九五年のブダペストにおける諸民族会議、この会議から全権を委任された実行委員会、一九〇六年のルーマニア人・セルビア人・スロヴァキア人代表による諸民族クラブの設立をあげることができる。

一八九〇年代に始まった非マジャール系諸民族の第三期の民族運動には、そのほかにも数多く共通の特徴が現われている。指導権が聖職者、教師、公証人、大・中の地主から明らかにブルジョア的なインテリ層に移ったこともその一つであるが、もろもろの新しい綱領が本質的に同じ内容であることも、注目をひかずにはおかない。この時期には、「声」紙のシュロバール綱領[2]、一九〇一年のスロヴァキア人の党綱領[3]、一八九七年のクルジュ Kolozsvér (Cluj) におけるルーマニア人会議の綱領[4]、一九〇五年のルーマニア民族党の綱領[5]、一八九三年の緑のザクセン人たちのメディアシュ綱領 Mediascher Programm[6]、一九〇二年のクロアティアにおけるセルビア人独立党の綱領[7]、一九〇三年のセルビア人急進党のオクチャン Okučan 綱領[8]、一九〇四年と一九〇六年のクロアティア人民進歩党の綱領[9]、一九〇五年のセルビア＝クロアティア連合の綱領[10]など、多くのものが発表されているが、これらすべてに共通の特徴は、民族的・社会的・ブルジョア＝民主的な諸要求が結びついていることであり、ブルジョア＝民主的な民族社会のための基礎をおくとともに、その民族社会がさらに自由な発展をとげることを保証しようとする努力がみられることである。その反面、かつて第一期に提出されたようないっそう過激な民族的要求は、内部の経済的・社会的発展の可能性を確保するために、むしろ隠されているのである。非マジャール系諸民族は、二重主義に制限された枠の内部で政治的勢力と文化的発展のための可能性をもとめてはいるけれども、それを上まわるほどに、ハンガリーの公生活の民主的改革――一般・秘密選挙権その他のブルジョア的自由権の確保――に、経済発展と社会政策のための措置――累進課

税、分割や譲渡を許さぬ農民の最小限所有地の確立、労働者保護法、義務制の一般的社会保障、国有地の分譲など――に、多数の民衆の生活水準と文化水準の向上に、経済的・社会的・政治的な組織化の自由の確保に力を入れているのが、目をひくのである。

以上、第三期の民族運動の特徴を一通りみてきたが、要するにそれは、民族運動の指導において装備や世代が変わったというだけではなく、運動の経済的・社会的基礎全体が変わり、組織の枠組、組織の方法、また戦術や政治的綱領が拡大し変化したことをも意味したのであった。この運動を指導した民族的な中位ブルジョアジーとブルジョア的な急進知識階級の民主的・社会的な綱領、彼らの政治活動および彼らの大衆との結びつきは、たしかに前の時期にはまったくみられないものであった。新運動のこのような性格を正しく理解し評価するためには、いま一度前章の考察の結尾に目を向けなければならない。

第三期の民族運動の特徴は、まず第一にそれを指導した民族ブルジョアジーの性格から説明される。非マジャール系諸民族のミドルクラスは、それ自身民主的・ブルジョア的なミドルクラスであり、真の「民族ブルジョアジー」であった。それは、民族的な立場から積極的役割を果たしたばかりでなく、それ自身抑圧された、自己の階級的利益の実現を妨げられたグループであったから、上昇しようと努力するブルジョア階級の盛時にみられた進歩的諸要素を保持していた。彼らがさらに発展し政治的勢力を得るための有利な前提を彼らにもたらすことのできるものは、この国の民主的改革をおいてはなかったから、多民族国家ハンガリーの反動的・反民主的な社会＝政治体制を破壊し、ブルジョア民主革命を続行することは、彼らの客観的な階級的利益であり、そこで彼らは、彼ら自身の客観的利益をマジャール人社会の支配階級と結びつけずに、彼ら自身の民族社会の下層と結びつけたのであった。(1)

彼らは、血統、生活様式、経済的なつながりなどによって、元来自民族の下層の人々の方に傾いていた。彼らはい

わゆる中位ブルジョアジーであり、十分に発展した幅の広い階級というよりは、むしろ一つのせまいグループにすぎず、ほとんど未分化の農民的＝小ブルジョア的体軀にのったひどく小さな頭ともいうべきものであったから、それ「自身の力」を通じて、すなわち資本主義的生産における自己の地位を通じてみずからの民族的意義を獲得したわけではなく、広範な農民および小ブルジョア層の間に広く根をはった経済的結合を通じてこれら社会層の一部を自己の政治的目標の傘下に引き入れることによってはじめて、自己の民族的意義を確立することができたのである。

この時期の民族的綱領が社会的・民主的諸要求を含んでいることは、新しい党派の指導者たちが彼らの実際活動において、多数の民衆に――何よりもまず農民および商工業に従事する小ブルジョアに――よりかかろうとしたことを示している。経済生活が沈滞し、ブルジョア化の過程が最初の段階に停滞している状態では、これらの社会層を動かすには、社会問題を取りあげることが最も適していた。彼らは、民族問題が社会問題と結びついて現われる場合にのみ、前者に敏感であった。独立小生産者層の経済的・政治的な組織化は――なかんずく協同組合運動の組織化は――、新方向の民族運動の実際活動において、一つの重要な役割を占めていた。こうして世紀転換後の年代に、スロヴァキア人・ルーマニア人・ザクセン人およびドイツ人の農民協同組合網が、いっそう広範に拡大されたのである。

非マジャール系諸民族の新しい指導者階級は、まず第一に経済的組織、すなわち次第に拡がってゆく銀行や信用機関のネットを、よりどころにした。彼らはこれらの組織で指導的地位に立ち、重役会のメンバーないし株主だったのであって、彼らの政治活動を組織化する際にも、これらの経済的制度のうちに含まれる可能性や金融力の源泉を利用した。[12] これらの経済的制度は、教会の自治や文化的制度よりもさらに大きく自由な政治的活動範囲を与えた。なぜなら、これらの制度は、その経済的性格のために、ハンガリー当局の監督や制限的影響力にさらされることが少なく、政治的・文化的・行政的な領域に集中したマジャール人の抑圧的民族政策から守られる可能性を、より多くもってい

たからである。こうして銀行は、新興の非マジャール人ブルジョアジーの勢力増大に役立ったばかりでなく、民族的インテリゲンツィアを強化し、政党の形成をも促進したのであった。

新しいブルジョア＝民主的な民族運動の時期には、その背後に、農民や小ブルジョア大衆の一部が経済的・政治的活動を増大し、それが民族運動の高揚に寄与したという重大な事実があったことも、みのがしてはならない。すでにみたように、十九世紀末、資本主義的発展から遠ざかっていた大部分の非マジャール人地域では、経済生活の一般的停滞、手工業的・農業的小生産の危機的状況と関連して、農民や小ブルジョアの困難な社会問題がおこっていた。そのため、スロヴァキア人およびルテニア人の山地の農民の間では、はやくも一八八〇年代に、土地を離れて海外に仕事と幸福をもとめるものが次第に数をましつつあった。公式の統計によれば、一八九九～一九一三年の間に移住した一二〇万のハンガリー国民のうち、六七％は非マジャール系の民族であった。しかしこの報告は実情を正確に反映していないとみられており[13]、首相官房の見積るところでは、一九〇〇年すでにアメリカには、ハンガリーから移住した三〇万のスロヴァキア人と一二万のルテニア人が生活しており、スロヴァキア人は移住者の四〇％にあたっていた。世紀転換後には、スロヴァキア人とルテニア人の移住は減り、反対にルーマニア人と南スラブ人の移住がはげしく上昇する傾向を示した[14]。

ハンガリー移民の評価については、すでにみたように多くの見解があるが、ここで特に注目する必要があるのは、移住が最終的には、非マジャール系農民を政治的・経済的に活発化させるうえで、重要な役割を果たしたことである。アメリカへの移住者はたっぷり儲けて、その大部分を故郷の家族に送り、この金額は、税金の支払いや、土地その他さまざまな生産手段の購入に用いられた。全村落が在米ハンガリー人のもうけで立て直された地域が、スロヴァキア、トランシルヴァニアおよびハンガリー本土のあちこちに存在した。農業労働者の賃金もふえ、土地の価格も、

流れこむドルのインパクトで高騰した。[15] アメリカからの送金は相当の額にのぼったため、振替を処理し送金額を管理する諸民族の金融機関の発展にも、農民の商品生産の発達にも、大いに貢献した。ハンガリーの政府筋は、自国からの移住者が一九〇〇年前後に故郷に送った金額を一三、〇〇〇万クローネと評価し、その少なくとも⅔は非マジャール系諸民族の社会資本を強化したとみている。これは過大評価との批判もあるが、実際かなりの額に達したことは、金銭の処理に関係した一群の外国銀行の計算からも、結論することができる。それは、一九〇一年度の送金が一、一〇〇万ドル（約二、二〇〇万クローネ）であったことを示している。[16]

第一次大戦前の十年間に、農民の協同組合運動が増大し、かなりの土地購入が行なわれたことも、スラヴ人およびルーマニア人の一部農民が裕福さを増したことの証明になるであろう。一九〇八～一三年の間に、トランシルヴァニアおよび東部ハンガリーのルーマニア人銀行の仲介で、一六六、〇〇〇ホールドの土地を七、〇〇〇～七、五〇〇万クローネの値段でマジャール人の中型地主から購入した。[17] また一九〇五～一九年の間に、マジャール人の大土地所有が分割される過程で、二〇七、〇〇〇ホールドの土地が非マジャール人農民の所有に移った。[18] 一九一〇年には、セルビア人の農民協同組合が八八、〇〇〇ホールドの土地を賃借りしている。これらの報告は、世紀転換後非マジャール人農民の上層部におこった経済的発展を示すものにほかならない。

農民の活動は主として経済的・社会的な分野に制限され、何よりもまず土地取得に向けられたが、しかし間接には、非マジャール人ブルジョアジーの資本の強化と彼らの経済組織の強化に、さらにそれを通じて民族運動の強化に貢献した。当時の県知事の報告はいずれも、アメリカ帰りのスロヴァキア人およびルテニア人農民の活発な社会的・政治的役割を強調しているが、その際また、これらの農民は民族問題にも感受性はあるが、彼らの関心はまず第一に社会問題に向けられ、民族運動がとことんまで行きつくかもしれぬ危険よりも、民主的・社会主義的な運動が強

化され躍進するおそれの方がはるかに大きいことを、力説している。[19] これは、帰国者が、新世界で得た経験を行動に生かしたことを物語っているといえよう。

要するに、中位ブルジョアジーに指導される民族運動や民族的諸政党の大衆的基礎を成したのは、二十世紀初頭の十数年間に次第に活発化の度合を強めていった農民層であり、それより稀薄な小手工業者、小商人、小役人、使用人などの小ブルジョア層が、彼らにくみしたのであった。民族運動の指導者たちは、これらの小ブルジョア的・農民的大衆に対する、少なくともそれらのかなりの部分に対する自身の政治的影響力を効果的に拡大しようとしたが、その際与って力があったのは、まさに彼らと銀行網や協同組合網との間に存在した経済的な結びつきであった。

このような非マジャール人社会の発展と構造は、ナショナリズムとデモクラシーがたがいに支持しあう形で結合することを可能にし――ただしこの傾向は、スロヴァキア人と南スラヴ人の運動にははっきり現われているが、ルーマニア人、ルテニア人、ドイツ人の間では、それほど強くは現われなかった――、被抑圧諸民族の民主的な中・小ブルジョアは、民族的立場からみて積極的な役割を演じたばかりでなく、社会的立場からみても進歩的な機能を果たしたのである。非マジャール系諸民族のブルジョア＝民主的性格の民族運動を指導した社会層――中位ブルジョアジーとブルジョア的知識階級――は、全国的にみてもはなはだ重要な要素であり、プロレタリアートと並んで、多民族国家ハンガリーの革命的・民主的改造のための社会的主力の一つであったということができる。

もちろん諸民族のブルジョアジーと下層階級の間の結びつきは、結局は資本主義的性質のものであり、銀行も社会的・福祉的性格をもった組織ではなく、収益の多い資本主義的企業であった。しかし、民族社会内での資本主義的階級対立の展開は、さしあたり背景に押しやられ、非マジャール人の農民・小ブルジョア・プロレタリアート大衆をまずマジャール人の大地主および大資本家に立ち向かわせたところの根本的対立の背後にかくれていた。この根本的な

対立は、民族運動にとってまことに好都合であり、民族運動の社会的基礎を拡大・強化するのに役立ったのである。

非マジャール人社会内部の資本主義的階級対立が二次的なものであり、なお十分な展開をとげていなかったために、民族運動の綱領のなかには、ブルジョアジーの利益に役立つブルジョア＝民主的諸要求だけでなく、勤労者大衆をはげまし味方に引き入れるのに適わしい社会的諸要求もまた、もりこまれることができた。それどころか、新綱領は、時には、民族的領域においてよりも民主的要求や社会問題の領域においていっそう急進的であり、民族的領域では、領土的自治を要求したアウスグライヒ当時の綱領と比較すれば、かなり温和化しており、二重主義および一八六八年の民族法の枠内で充足されうる諸要求を提出するにとどまっているのである。

このように、第三期民族運動の新綱領が、民主的要求や社会問題の領域においていっそう急進的であり、民族的領域ではむしろかなり温和化していたのは、何故であろうか。

その理由としては、すでにあげたもののほかに、なお次の諸点が考えられる。第一に注目されるのは、十九世紀末ハンガリーの経済発展の特殊な性格であり、具体的にいえば、資本主義の発展が経済的統合の過程を推進したことである。そもそも経済的統合は最初からハプスブルク王国内の資本主義的発展の趨勢だったのであって、これこそ、統一的関税地域の創出というブルジョア的改造の特殊な方式を推し進め、王国の組織問題では二重主義的解決を促進したのであった。このような経済的統合の過程は、別々に発展し相互に異なる経済構造・社会構造をもった諸地方を、より大きな統一体に――ハンガリー内で、もしくは全王国の内部で形成される統一的な資本主義市場に――結びつける作用を営んだ。ますます強められ緊密化されてゆく経済生活と交通の糸――鉄道網、市場と交換による結合、信用制度、資本流動の傾向など――が、非マジャール人の居住する諸地方をマジャール人の居住する中心部と結びつけた。さらに、オーストリア＝ハンガリーの金融資本がこれらの地域で優位をしめたことも、重要な統合の要因となった。

ハンガリーでは、経済的統合をもたらす経済的・社会的な、また政治的な諸要因が、王国の西半部に比較して、いっそう強かったのである。

世紀転換のころハンガリーの民族運動が示した躍進、それらの運動の経済的・社会的基礎の相対的な強化と拡大も、基本的には、王国の枠内での完全な経済的統合をめざして進む発展過程の産物であったと考えられる。とすれば、民族運動の躍進は、民族的な独立と統一のための経済的前提の発展とは、一致していなかったといえよう。もちろん、民族運動を規定するのは経済的要因だけではなく、政治的・文化的要因も重要な意味をもつものである。そして当時は、民族の統一や独立をめざす諸要因は、経済的・社会的前提の面よりも政治や文化や意識の面でいっそう急速かつ強力に展開されたのであった。その際重要な役割を果たしたのは、一方では、マジャール人支配階級のショーヴィニスティックな民族政策、彼らの加えた政治的・文化的な抑圧、彼らの強制的なマジャール化の努力であり、他方では、外部からの政治的諸要因、すなわち独立国であるルーマニアとセルビアの存在およびその民族的牽引力であった。しかし二重主義時代には、王国内部の経済的諸関係の糸の方が外部との結びつきよりもずっと緊密であったから、このような経済的な結びつきが、まず第一に王国内でのチェコ人とスロヴァキア人の統一運動の発展を、同じく王国内での南スラヴ人の統一運動の発展を促進する役割を果たしたのである。

もちろんしかし、王国内では資本主義的発展のうちに民族的独立への傾向が結局現われなかった、というわけではない。ただこの傾向は、王国の複雑な依存体制のなかでは、異常に矛盾した道を歩み、遠まわしに模索するといった経過をたどって、力を増していったのであり、あらゆる地区、あらゆる民族の間で同時に同じ強さで力を得ていったわけではなかったのである。いま問題にしている時期には、資本主義的発展の効果は、被抑圧諸民族の独立運動や統一運動のための経済的・社会的前提をつくり出す方向よりも、むしろ全国を経済的に統合する方向でいっそう強く現

われたのであり、二十世紀初頭の危機に続く経済的躍進は、非マジャール人ブルジョアジーの発展にも好都合であった。こうした事情が、諸民族の民族運動とその綱領にも影を投げかけていたのである。

それとともに、このような傾向をもつ資本主義的発展は、民族的な独立や統一をもとめる諸要因をつくり出すよりもはるか大規模かつ広範囲に、社会的対立をつくり出し、社会的・革命的な力をつくり出した。いいかえれば、資本主義的発展の効果は、一方では経済的統合の方向で、他方では資本主義社会の内的な階級対立を、せまい個々の民族社会の内部ではなく全王国の枠内で発展させ深化させる方向で、いっそう強く現われたのである。ハンガリーでは、資本主義的発展は、民族的独立運動の経済的基礎を成長させ成熟させるよりも、ブルジョア＝民主的な――いっそう遠い展望では社会主義的な――改革の諸力を、すなわち全王国の内的革命の諸力を、いっそう急速に成長させたのである。経済過程のこのような性格と傾向は、世紀転換のころ活気を増した諸民族の運動にみられる多くの矛盾した特徴を明らかにするものである。

第二は、戦術的配慮ともいうべきものである。新しい綱領が、領土的自治などの強い民族的＝政治的要求をおさえて社会的＝経済的な要求を表面に押し出したのは、マジャール人の民族政策と深いつながりをもっていた。マジャール人の民族政策の抑圧的・制限的措置は、主として政治的・文化的領域に集中したため、あらたに登場した中位ブルジョアジーの経済的基礎や経済組織にはそれほど強い圧力を加えなかった。これに比較すれば、先立つ時期の民族運動を指導した知識階級の立場は、マジャール人の民族政策の圧力をいっそう強くこうむっていたのである。

第三は、二十世紀初頭の経済的躍進と農民および小ブルジョア層との関係である。経済的発展は、非マジャール人ブルジョアジーの発展に好都合であったばかりでなく、農民および小ブルジョアの比較的富裕な上層部も、この繁栄の有利な作用をある程度受けていた。中位ブルジョアジーに指導される民族運動の広範な社会的基礎をなしたこれら

の階層の利害が、何よりもまず、新しい民族綱領の社会的な諸点を打ち出させたのであった。(23)

(1) 以下の叙述は、Katus, op. cit., S. 149 ff. に負うところが多い。
(2) V. Šrobár, Naše snahy (Unsere Bestrebungen), ——Hlas, I. Juli 1898.
(3) G. G. Kemény, Iratok a nemzetiségi kérdés történetéhez Magyarországon a dualizmus korában (Schriften zur Geschichte der Nationalitätenfrage in Ungarn im Zeitalter des Dualismus), Bd. Ⅲ, 1900—1903, Budapest 1964, S. 151 f.
(4) op. cit., Bd. Ⅱ S. 674 f.
(5) G. G. Kemény, A. magyar nemzetiségi kérdés története, I. rész ; A nemzetiségi kérdés a törvények és tervezetek tükrében, 1790—1918 (Die Geschichte der ungarischen Nationalitätenfrage, I. Teil ; Die Nationalitätenfrage im Spiegel der Gesetze und Entwürfe, 1790—1918), Budapest 1947, S. 156 f.
(6) Die mediascher Zusammenkunft. Kronstädter Zeitung, 4/8. November 1893, Nr. 257, 259, 260.
(7) J. Ibler, Hrvatska politika, 1903 (Kroatische Politik, 1903), Zagreb 1914, S. 226—228.
(8) op. cit., S. 233—234.
(9) J. Ibler, Hrvatska politika, 1904—1906, Zagreb 1914—1917, S. 277.
(10) op. cit., S. 465—469.
(11) しかし、非マジャール系諸民族のミドルクラスがことごとく自民族に忠誠であったとはいえない。非マジャール系のブルジョア的ミドルクラスで、マジャール化したものも少なくはなかった。十九世紀末までに、都市がハンガリーの文化・経済・政治生活の中心になっていたが、ヤーシによれば、都市化はとりもなおさず、同化ないし「マジャール化」過程の有機的な一部であった。(Jászi, A nemzeti államok kialakulása, pp. 383—406.) ハンガリーのブルジョアジーは、貴族以外の出身であったかぎり、マジャール人の間で相容れぬ要素であり、指導者となることはできなかった。これがマジャール化の最大の原因であった。非マジャール系のミドルクラスが同化したのは、外的な圧迫と、出世しようとする願望の双方が動機をなしたものと思われる。教育制度の強制的なマジャール化は、非マジャール系諸民族が彼ら自身の教養あるエリートを発展させるのを妨げるという狙いをもっていたのである。しかし、被抑圧民族の指導者たちは、この「マジャール人らしくなった」彼らの同胞を、変節者とみな

した。Barany, op. cit., p. 255 参照。

(12) Berend and Ránki, op. cit., p. 184.

(13) なぜなら、官庁の統計的把握が始まったときには、すでにスロヴァキア人とルテニア人の多くは土地を離れていたからである。Katus, op. cit., S. 181.

(14) A magyar szent korona országainak kivándorlása és visszavandorlása. op. cit., Bd. 67, S. 24—30; OL ML 1903-XVI-Nr. 71.

(15) バラニ教授はまた次のように記している。Barany, op. cit., p. 258. 首相カールマーン＝セールの一九〇二年の評価によれば、合衆国からの送金額は、一年に合計一〇、〇〇〇万クローネに達した。一九〇七年に刊行された別のハンガリーの書物は、年額一～二億クローネと見積り、年送金額の最高は一億五、〇〇〇万クローネであったと述べている。ハンガリー＝アカデミー賞を受けたある研究は、帰還者によってハンガリーに持ち帰られた金額を考慮に入れないで、二～二・五億クローネというのが、たぶん真実に近いであろうと述べている。第一次大戦後、議会の審査中に行なわれた証言によれば、――そこには誇張があると思われるが――「ハンガリーは従来、例年約一億ドルを受取ったのである」。正確なデータは得られないが、合衆国でもうけられ故国に送られた金額は、ハンガリーが一九一四年以前に外国資本に対して支払わねばならなかった利息の非常に大きな部分を容易にカバーできたであろう。いっそう内輪に見積っても、アメリカからの収入は、一九〇七～一一年の間にハンガリーのすべての鉱山と熔鉱炉から得られた年収を、約二五%上まわったのである。

一九一二年のはじめに、シュテファン＝ティサ Stephen Tisza 政府の強い支持をえて、ハンガリーのもろもろの金融団体は、ニューヨークに Transatlantic Trust Company を設立したが、この会社の主要な仕事は、在米ハンガリー人の貯蓄、投資、義援金を、政府の支配するルートを通じてハンガリー経済のなかへ吸いあげることであった。Barany, op. cit., p. 258 f. ハンガリーの支配者たちもこの特殊なケースには好意的であったことが、注目される。

(16) OL ML 1910-XIV-Nr. 2164.

(17) I. Bethlen, Az oláhok birtokvásárlásai Magyarországon az utolsó 5 évben (Die Grundbesitzkäufe der Rumänen in den letzten 5 Jahren in Ungarn), Budapest 1912.

(18) B. Jancsó, Defensio nationis Hungaricae, Budapest 1920, S. 185.

(19) OL ML 1902-XXIII-Nr. 4446.

(20) 本章で問題にした、新傾向の民族運動ないしその指導者についての学界の評価は、必ずしも一致していない。そのうちのいくつかを紹介しておこう。第一に、当該諸民族のブルジョア的な歴史叙述が、両大戦間期に、民族的な統一や独立を準備し直接実現したこれらの指導者たちを栄光のヴェールで包んだことは、よく知られている。彼らの大多数が、新民族国家の形成と組織化にあたって大きな役割を果たしたばかりでなく、新国家の指導においても重大な役割を果たしたことを思えば、このことは理解にかたくない。第二に、民族主義的なハンガリーの歴史叙述は、その偏見と非歴史的な態度の故に、諸民族の民族運動の指導者たちを、第一の傾向とは正反対にきわめて低く評価し、あるいははげしく非難している。第三に、マルクス主義的な歴史叙述も、独自の立場から、久しい間彼らに批判的な態度をとり続けてきた。それは何よりもまず、新傾向の民族運動のもつブルジョア的性格と、それに由来するマイナス面を強調し、帝国主義時代には、ハンガリーの非マジャール系諸民族のブルジョアジーは、民族運動においてあらゆる積極的役割を失ってしまっていたと主張する。この立場からみれば、被抑圧諸民族の経済的・政治的独立をもとめて戦った知識階級や中位ブルジョアジーは、かつての第三身分の革命的気勢や前向きの積極性をまったく失ってしまった先進資本主義諸国の反動的な金融ブルジョアジーと大差ないものであり、したがって、この立場は、民族運動の指導者が提示した綱領の社会的な部分のなかに、貧農や労働者を迷わすための空虚なデマゴギーを認めるにすぎず、彼らの民主主義を瞞着とよび、彼らの経済的・社会的な組織活動や政治活動、また彼らの広範な社会層との結びつきをも、単にプロレタリアートの社会主義運動を解体させプロレタリアートを孤立させるための行動にすぎないとするのである。しかし、これらの評価がいずれも一面的であることは、われわれの検討の結果からすでに明らかである。Katus, op. cit., S. 185 f. 参照。

二〇　民族運動と社会運動の接点、政治的要因

最後に、これまで留保してきた、民族ブルジョアジーの民族運動とプロレタリアートの労働運動ないし社会主義運動との関係を検討しなければならない。

従来、マルクス主義の文献のなかには、労働者を民族運動や民族的理念の主要な担い手とみなし、労働者や貧農の

行動のうちに民族的特徴を指摘する見解が広がっていたが、同時代の豊富な資料を検討すれば、この見解は正しいとはいえない。[1] 非マジャール系諸民族の農・工業プロレタリアートの大衆運動と民族ブルジョアジーの運動とは、たしかに同一の経済発展の帰結であったし、時期的にも、民族運動の躍進は、諸民族の地域における社会主義運動の発生と一致していた。また民族運動に非マジャール人の工業労働者が参加したことも、事実である。

非マジャール人プロレタリアートの大衆運動は、まず第一に、セルビア人、ルーマニア人、ドイツ人、スロヴァキア人の農業プロレタリアが多数生活していた南部ハンガリーおよびハンガリー大平原の東部と南東部の辺境でおこった。一八九〇年代に展開された農業社会主義運動は、一八九七年大平原で頂点に達したが、それには、セルビア人、ルーマニア人、スロヴァキア人のほかに、マジャール人の農業労働者も多数参加していた。農業社会主義の新聞も、一八九〇年代後半にはじめて姿を現わした。非マジャール人プロレタリアートの運動は、第二に、北部ハンガリーのスロヴァキアおよびバナートの工業中心地で働いていた、雑多な民族から成る工業労働者の間でおこった。一八九〇年代後半には、非マジャール人労働者の団体がはじめていくつか生まれ、諸民族の労働者新聞も登場した。二十世紀初頭には、ハンガリー社会民主党の諸民族グループも生まれており、一九〇二年から〇六年にかけては大衆運動が広範囲に展開された。[2] これらをみれば、第三期の民族運動が、一八九〇年代末から二十世紀初頭にかけての農・工業プロレタリアートの経済闘争や政治闘争と重なりあっていたことは、明らかである。

しかし、最近の立ちいった研究によれば、[3] これらの労働運動は民族運動とは決定的に異なる現象であり、ほとんど例外なく、プロレタリアートの独立した階級闘争的・社会主義的な行動であった。それらは資本主義的な搾取に向けられたもので、民族的抑圧に向けられたものではなく、そのなかに民族的な性格や動機を確認することはできない。農業社会主義運動も、封建的遺制とからみあった資本主義的搾取を緩和し、さらには絶滅するために展開され、究極

的には徹底的な土地改革を狙ったものであった。スラヴ人およびルーマニア人プロレタリアートの運動は、ブルジョア的・民族主義的な政党によって組織されたのではなく、ハンガリー社会民主党の民族委員会や地方的組織によって、もしくは、同じく民族的基礎にもとづかない農業社会主義的諸政党によって組織されたものであり、彼らはあらゆる場合にマジャール人およびドイツ人労働者と共同して、階級的利益の実現という共通目標のために戦っていたのである。たとえば、一九〇四年にトランシルヴァニアのアレスト Elesd（Alesd）でおこった悪評高い虐殺事件をみると、このとき社会民主党の手で組織された明らかに社会主義的なデモは、地方官庁やハンガリー独立党など、社会主義的な組織化を迫害するものに対して行なわれたもので、参加者の多くはルーマニア人であったが、一部マジャール人の貧農や労働者も加わっていた。有罪の宣告を受けた人々のうち最高刑（四年の懲役）を課せられたのは、オラデア Oradea 出身の社会民主党の組織家デセー＝ジルベルシュタイン Deszö Silberstein であり、他の受刑者もルーマニア人とマジャール人の社会主義者から成っていた。その反面、当時の「民族的反抗」や諸民族の民族的なデモの中には、労働者や貧農はほとんど見出されない。一九〇五年のトランシルヴァニアの農民運動やスロヴァキア人労働者の政治行動には、民族的要求が現われてはいるが、その場合にもそれは、包括的な農業民主主義的もしくは社会主義的な綱領の一部にすぎなかったのである。(4)

しかしながら、諸民族の民族ブルジョアジーは、民族運動の躍進の過程で、自己の政治的な影響力と指導を、農・工業プロレタリアートのうえにも、またこれらの人々の経済運動・政治運動のうえにも拡大しようとした。そして民族運動と社会運動の間には、動機や目標が異っていたにもかかわらず、ある種の連繋ないし共同作業の成立する可能性がないわけではなかった。すでにみたように、非マジャール系諸民族の地域では、支配階級の機能を営んだのは自民族のそれではなく、マジャール人およびドイツ人の大地主や大資本家であったために、非マジャール人社会のせまい

枠内では、資本主義的階級対立は十分な効果を現わさなかった。工業化がかなり急速な進歩をとげた諸地域でも、たいていの場合、利益の最良部分をすくいとったのはマジャール人およびオーストリアの資本家たちであったから、そこでは反マジャール的ないし反オーストリア的感情がよびおこされ、それがまた自民族内の「民族的団結」にたよる気持をかきたてた。こうして、旧来の非マジャール人農民とマジャール人地主との争いに、非マジャール人労働者とマジャール人資本家との衝突という新しい要素が付け加えられ、十九世紀末にはかなり明確な形をとっていたのである。

ハンガリーでは、資本主義的な階級対立は、民族性と自国語にもとづく分布の境界線を越えて、全国的な規模でつくり出されていたのであって、ブルジョア的民族運動と労働者の運動とは、根本的には共通の敵、すなわち王国の支配階級であるマジャール人の大地主およびオーストリア＝ハンガリーの大資本家に対立しており、彼らの直接の政治的目標もまた共通していた。普通選挙権およびブルジョア＝民主的自由権の獲得、王国の現存政治体制の打倒がそれであり、両者は、政治と行政における支配階級の代表者に対して、民族的抑圧と社会的抑圧とを同じように行なった支配階級の権力装置に対して戦っていたのである。[5] このような状況のもとでは、非マジャール人ブルジョアジーが、労働者のある種の要望を彼らの政治的綱領のなかへ取り入れることは、十分に可能であった。なぜなら、彼らにとって、自分たちの設定した民族的目標をプロレタリアートの支持を得て達成したあかつきには、マジャール人の大地主とオーストリア＝ハンガリーの大資本家の犠牲においてプロレタリアートの諸要求を実現することは、さして困難ではないと思われたからである。そのうえ、ハンガリー社会民主党の民族政策にはある種の欠陥があり、民族問題にかんする態度に動揺やあいまいさがみられたことを併せ考えるならば、[6] ブルジョア的民族運動と非マジャール人プロレタリアートの社会主義運動との間に一時的な共同作業が成立する余地は、多分にあったといわねばならない。第一次大戦

前にこのような一時的共同作業が実際に成立した例としては、「ナロードニ＝ポクレット」期（一九〇三年）のクロアティア人の場合や選挙権のための闘争などがあげられる。(7)

しかしこれは非常に稀なケースであって、プロレタリアートを味方にし、これを民族運動の背後に結集させようとする非マジャール人ブルジョアジーや知識階級の試みは、概してそれほどの成功を収めなかった。ただスロヴァキア人の「声派（フラス）」だけは、スロヴァキア人の農業プロレタリアートと半プロレタリアートのうえに、またスロヴァキア人の社会主義的労働運動のうえに、その政治的影響力をかなり持続的に及ぼすことができた。しかし、ブルジョア的民族運動と社会主義的労働運動との対立は潜在的には依然存在していたから、ブルジョア＝民主革命を遂行するために成立した政治的共同作業には限界があり、両パートナーのいずれも、この事実を見失ってはいなかった。(8) 非マジャール人のブルジョアジーは、結局は民族的独立のために、自己の民族国家と民族的市場をつくり出すために戦ったのであって、この戦いの途上で、ある種の社会問題の民主的もしくは急進的な解決は、彼ら自身の階級的目標を達成するための有効な手段と考えられたにすぎなかった。これに反して、マジャール人および非マジャール人のプロレタリアートは、資本主義的な搾取を除去するために戦ったのであって、その際ブルジョア＝民主的な、さらにそのあとに来る社会主義的な革命が、広範囲な全王国の枠内で行なわれるか、それともより小さな民族国家のなかで行なわれるかは、本質的にはどうでもよいことであった。しかし、階級闘争の見地からは前者の方がいっそう有利であるようにみえたので、当時の社会主義運動のなかでは、「大きな経済単位」の利益の強調が一つの役割を演じていた。すなわち非マジャール系諸民族の農・工業プロレタリアートは、王国をブルジョア的に変革し、それを通じて社会主義革命に移行するという見通しの方に、どちらかといえばいっそう強い関心を抱いていたのである。そしてそれは、王国の経済発展の客観的傾向を表わすとともに、王国のプロレタリアートの階級的利益を表わすものでもあっ

た。(6)

以上の考察から明らかなように、マジャール人および非マジャール人労働者の運動は、国際的基礎に立つ社会主義的な階級闘争であって、直接の綱領でも遠い目標やスローガンでも、ブルジョア的民族運動とははっきり異なっていた。他方非マジャール系諸民族の民族運動の指導者は、第一次大戦前の時期にも依然として民族ブルジョアジーであり、小ブルジョアと農民が彼らの運動の大衆的基盤をなしていた。しかし、上昇の途上で権力をもとめて戦いつつあった民族ブルジョアジーは、彼らの役割の積極的・進歩的な傾向を、民族的領域でも社会的関係においてもなお失っていなかったために、民族運動とプロレタリアート運動との間に一時的な政治的共同が成立することは可能であったが、農・工業プロレタリアートが民族的な独立＝統一運動の主力になったことはけっしてなく、彼らは本質的にはどこまでも社会主義革命の前衛であった。社会主義革命に移行するブルジョア＝民主革命は、同時に民族問題の解決、民族的抑圧体制の除去を意味したけれども、それはしかし、社会主義運動の勝利の結果自然にそうなるというだけのことであって、民族問題の解決が根本的な目標だったわけではなく、したがってまた最初から民族問題解決の何かある具体的形態がはっきり前提されたわけではなかった。ブルジョア的民族運動と社会主義的労働運動とは、同一の方向に向かってはいたが、第一次大戦の最後の時期まで本質的には二つの異なる軌道を走っていったのである。とはいえ、一九〇〇年と一九一八年の間に、諸民族と諸階級の抑圧の源泉であった王国の在来の社会＝政治体制に決定的な打撃を加えたのは、労働者階級であり、彼らを含む大衆運動こそ、疑いもなく、王国の崩壊と解体を促進した一つの重要な内的要因であった。これらの闘争は、支配体制を弱めかつ弛めることによって、客観的には民族解放に役立ったから、その限りでは、社会的解放のための闘争と民族的解放のための闘争とはたがいに深くつながっていたということができる。

以上はしかし、大筋についてのかなり大胆な仮説的試論であって、ハナーク教授の指摘するように、この時期の民族運動と社会運動の関係はまことに複雑・微妙であり、多分に流動的側面を残していたことも事実であり、簡単に割り切ることはできない。社会主義運動が、民族的自由獲得運動のなかに含まれているエネルギーを、最初は民主的革命のために、のちには社会主義革命のために動員することができたのか、それとも、民族闘争を指導するブルジョアジーが、自己の目標達成のために社会主義的な大衆運動の力を獲得することができたのか、という重要な問題は、当時の大衆運動の内容と目標をみれば、第一次大戦に先立つ十数年間はなお未確定のままに留まっていたことが知られるのである。小市民層や農民の間にある程度の影響を及ぼしえた民族ブルジョアジーも、労働者や貧農のなかに入りこむことはなはだ困難であったが、他方社会民主党も、民族的中間層や知識階級を自己の陣営につけることはできなかった。それは、すでにふれたように、社会民主党が民主的変革という最も重要な問題に動揺した態度を示したばかりか、民族問題の解決にも無力であったという事実によるものであった。

第一次大戦中の自発的な大衆運動は、どちらかといえば、反軍国主義的、階級闘争的な抗議行動という面をもっていた。戦争による荒廃、高まる不幸、たえず強化される抑圧によって、大衆の間には次第に革命的気分がよびさまされていったが、一九一七年末から一九一八年はじめにかけてロシア十月革命の影響下に高まった大衆運動は、主として反軍国主義的性格のものであり、一九一八年一月のストライキも、よくいわれるような民族的色彩の強いものではなく、ソ連との連帯および戦争の否定を表現したものであった。戦争が進行し、二重帝国の政治力と武力が動揺をきたしたのち、この国の社会＝政治体制をくつがえして民族的新秩序を樹立するという革命的課題を、民族ブルジョアジーの指導下にブルジョア的基礎のうえに実現するか、それとも、プロレタリアートが民族自決の原則に基づいて社会主義的基礎のうえに解決するか、という問題が、いっそう尖鋭化された形で登場した。その際、歴史的状況はほと

んどすべて第一の方向に幸いし、ブルジョア的民族運動は、革命的社会主義運動の一部を自己の内部に引きこんで従属させる一方、他の一部を弱体化しもしくは抑圧した。しかし第二の方向も単に非現実的・理論的な可能性にとどまったわけではなく、そのことは、ブダペストの都市プロレタリアートの政治的行動や一九一九年のベラ＝クン政権の成立をみれば明らかである。これら二つの可能性が競合しながら進行する過程で、労働者階級の追及した王国変革の方式がどのような力関係のもとでまたどのような政治的その他の理由で挫折したかを、具体的に解明することは、今後に残された重要な課題の一つである。

以上われわれは、二十世紀初頭から第一次大戦に至る時期のハンガリーの非マジャール系諸民族の民族運動を、主として経済的・社会的諸関係に注目しながら考察し、若干の重要な特徴を取り出した。しかしいうまでもなく、民族運動の発展とその最後の帰結は、二重帝国内もしくはハンガリー内に生じた経済的・社会的諸要因のみによってすべて説明できるわけではない。むしろ経済的・社会的諸要因と民族運動の関係には、たがいに矛盾する多くの微妙な側面が含まれており、それらは、外部からのインパクトによってはじめて決済され単一の方向にまとまってゆく傾向を、多分にもっていたのである。その際現実に重要な役割を果たし、ぜひとも考慮に入れなくてはならないのは、政治的なまた国際的な諸要因、具体的にいえば、ハンガリーの政治生活の進展、なかんずくマジャール人支配階級の民族主義政策、二重主義体制の危機[10]、帝国西半部オーストリアにおける民族問題の発展[11]、国際的な力関係のなかに現われた変化――とりわけセルビアとルーマニアの状態にみられる変化――などの及ぼした影響であり、王国の崩壊と非マジャール系諸民族の民族的独立の実現は、これらすべての要因の相互作用の結果だったのである。この点について若干付言しておこう。

新時期の民族運動にみられる特徴の一つは、それらの運動が、二重主義の枠内で経済・政治・文化各方面の民族的発展をはかろうとするにとどまらず、さらに進んだ民族目標を実現するための可能性を注意深く追求しはじめたことである。そしてこの可能性を彼らに与えたものは、一方では王国の二重主義体制の危機の増大であり、他方では国際的な力関係の発展であった。こうした事情のもとで、まず文化面次に政治面で、さまざまな民族の統一運動が広くおこりはじめた。ルーマニア人の文化同盟 Liga Culturală, チェコスロヴァキア協会 Ceskoslovenska Jednota の設立、ザグレブとベオグラードに生まれたセルビア＝クロアティア人の青年会議、文学的・政治的な新聞類、それに続くセルビア＝クロアティア連合の設立、カルパティア＝ルテニア人の Skizma 運動にみられるルテニア人と大ロシア人の連繋、トランシルヴァニアのザクセン人と南部ハンガリーのドイツ人の間に発生した「全ドイツ的」傾向などは、その主要なものである。それらはいずれも、ハンガリーの国外に、それどころか二重帝国の国境外に生活していた同胞や同族者との結合をもとめている点が特徴的であり、これらの運動の自然の方向は、疑いもなく、最終的にはハンガリーの解体にとどまらず、全オーストリア＝ハンガリー王国の解体に向かっていた。しかし、王国の被抑圧諸民族の内的発展と力関係からみて、二十世紀はじめには、それが現実化する可能性はほとんどなかった。そのため、第一次大戦前の二十年間に、非マジャール系諸民族の政党や指導者たちの政治的プランのなかには、二重主義体制の危機と平行して、歴史的なハンガリー王国の枠は廃棄するが依然ハプスブルク帝国の枠内で、連邦的・民族的・ブルジョア＝民主的改革を通じて民族問題を解決しようとする思想が、ますます多く前面に現われてきた。[12] そして実際にも、スロヴァキア人・ルーマニア人・クロアティア人は、民族問題をハプスブルク帝国の内部で連邦的ないし三重主義的次元で解決しようとするオーストリアの政治勢力と結びつこうとしたのである。ハプスブルク帝国の完全な解体、独立した民族国家の形成、帝国外の同胞や近親民族との政治的結合といった項目は、第一次世界大戦が国際的強

国としてのハプスブルク帝国の地位と軍事力を、またそれと連動して帝国内部の求心的な統合力を動揺させ、帝国解体の可能性が現実のものとなるまでは、近い将来の具体的目標としてもろもろのプランのなかに姿を現わすことはなかったのである。

民族問題についての考察を要約しよう。十九世紀後半以後のハンガリーの資本主義的発展は、マジャール人地域と非マジャール人地域の経済的水準の差を解消することはなく、何よりもまずマジャール人金融資本の利益に奉仕したが、しかし同時に非マジャール人地域の経済生活の下層部をもある程度強化し、地方的な農民社会のブルジョア化と分解を促進した。これらの地域で非マジャール系諸民族の民族ブルジョアジーは、マジャール人資本家のなお力の及ばぬ真空地帯に根をはり、自己の地位を拡大・強化することができた。世紀転換時以後彼らの指導する新しい民族運動が展開されたが、それはブルジョア＝民主的・社会的傾向をもち、広範な農民および小ブルジョア層をたよりにするとともに、自己の民族的目標のための戦いを、貧農やプロレタリアートの社会運動とも結びつけようとした。プロレタリアートの運動は、本来民族運動とは異質の革命運動であったが、当時の状況下では両者の間に連繋の生まれる可能性がなくはなく、少なくとも敵対関係は存在しなかった。こうしてつくり出された民族的解放のための内的・社会＝政治的前提のうえに、民族運動の指導者たちは、第一次大戦末期に中欧諸強国の軍事的敗北によって生じた内外の有利な状勢を、自己の民族的目標実現のためにうまく利用することができたのである。その意味で、ハンガリーの資本主義的発展の生み出した非マジャール系民族ブルジョアジーと全国にわたる広範なプロレタリアートこそ、まさにハンガリーの民主的変革のための内的原動力であり、推進力であった。要するに、オーストリア＝ハンガリー二重帝国において、資本主義的発展は同時に二つの力に――統合的な力と分解的な力に――刺激を与えたのであった。それは、

外部との経済的なつながりよりも王国内部の経済的なつながりを一段と強化したかぎりで、一つの統合的な力であったが、階級的な対立を促進し国内革命の諸条件をつくった点で、分解的な力として作用したといわねばならない。

（1）P. Hanák, "Einige sozialökonomische Aspekte der nationalen Frage in der österreichisch-ungarischen Monarchie," in Die nationale Frage in der österreichisch-ungarischen Monarchie 1900—1918, Budapest 1966, S. 322 f.; Katus, op. cit., S. 185 f.

（2）Katus, op. cit., S. 185.

（3）Katus, op. cit., S. 183.

（4）Hanák, op. cit., S. 323.

（5）プロレタリアートが民族ブルジョアジーに指導される民族運動をさほどの抵抗なく支持した理由として、マジャール人地域と非マジャール人地域における賃金格差の問題をみのがすことはできない。当時ブダペストには、非常に多くの加工業や製造工業が存在した。首都には発展の可能性の多い市場があり、またそこではすぐれた輸送の便宜が得られたので、工学会社の八〇％およびすべての印刷工業を含む、商社・技術・工業関係の企業の大多数が、首都に設立されていたのである。これに対して、少数諸民族の居住地域は、ハンガリーの中心を離れた遠隔地であり、そこに存在したのは、主として加工業もしくは、原料資源の近くに位置することによって利益を得た生産規模の小さな工場であって、これらの会社の不熟練労働者ないし適性のおとる労働者の賃金が、マジャール人の住む中央地区の労働者に支払われる賃金よりも実質的に低かったことは、いうまでもない。マジャール人地域の労働者で一週一四クラウンという全国平均額を下まわる賃金を受けていたのは、わずか三〇％にすぎなかったが、非マジャール人が多数をしめた十二の県では、労働者の五〇％以上が平均額以下の賃金を支払われていた。少数民族の居住地では、賃金水準はハンガリー全体のそれよりも二〇％低く、マジャール人の住んでいた中央地域のそれよりも三〇％低かった。他方、全国平均を上まわる賃金を得ていたのは、少数民族の地域では、労働者の二五％にすぎなかったのに、マジャール人地域では、四五％に及んでいた。当時非マジャール人の諸地域には、土地配分の不均等と工業化の立ちおくれのために、全国平均をかなり上まわる過剰な労働力があり、約一、四〇〇、〇〇〇に達するセルビア人、ルーマニア人、スロヴァキア人の農業プロレタリアートの大部分は、彼ら自身の民族的地域内で仕事をみつけることはできなかった。彼らの多くは、不幸なマジャール人の仲間

とともに、他国への移住を強いられる一方、工業関係の職業を見出すことを期待してブダペストに吹きよせられ、その数はたえず増大していったが、そこでは彼らは、不熟練労働者として臨時の仕事でどうにか生計を立てるほかなかったのである。政治的差別待遇とこのようなみじめな経済的・社会的条件に苦しんだ非マジャール人労働者は、みずからの絶望的窮状の緩和をもとめて声高く叫ばざるをえず、二十世紀への転換時までに、労働者階級の組織である社会民主党は、彼らの間にすでに一つのしっかりした足場を獲得していた。しかし、ブルジョアジーがすでに効果的な民族主義運動をうち立て、その宣伝キャンペーンが成功を収めつつあったのをみて、労働者たちは、同時にまた彼らの問題の解決を民族主義運動の枠内で見出そうとしたのである。一方非マジャール系諸民族のミドルクラスは、自民族社会内におけるブルジョアジー・知識階級と農民・労働者の間に対立が特に深くなかった事実を利用して、彼らの民族主義的な努力に、大衆からできるだけ広範な支持を得るようつとめ、かなり成功した。彼らは、マジャール人の地主や、マジャール人およびユダヤ人の資本家と争う際に、自分自身の努力だけでは自己の階級的利害の実現をはかることができなかったので、みずからの階級的な不平をもっぱら民族的抑圧のせいにしたのである。こうして非マジャール系民族のミドルクラスは、民族運動の指導権をその手に収め、小農や労働者の心を民族運動の方向に向けることに成功したのである。Berend and Ránki, op. cit., p. 185 f.

(6) J. Jemnitz, "Nationalism and internationalism and the labour movement at the turn of the century," Nouvelles études historiques, Vol. 2, Budapest 1965, pp. 153—172; T. Erényi, "Die Sozialdemokratische Partei Ungerns und der Dualismus," Etudes historiques, Vol. 1, Budapest 1970, S. 397—426; Katus, op.cit., S. 185 参照。

(7) Süle, op. cit., S. 112—165; Katus, op. cit.

(8) Katus, op. cit., S. 185.

(9) この点については、最近のハンガリーのすぐれた研究者の間にも、若干の意見のくいちがいがある。たとえばベレンドとラーンキは、民族運動と社会運動の結びつきをかなり重視しているが、ハナークやカトウシュは、これにはかなり懐疑的で、むしろ問題提起を行なう形になっている。Berend and Ránki, "Econuic Factors," op. cit., p. 186; Hanák, op. cit., S. 324.

(10) 拙稿「ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題」『スラブ研究』二〇、一九七五年六〇ページ以下参照。

(11) 拙稿「ハプスブルク帝国の統合と分解をめぐる諸問題」『北大法学論集』二三ノ二・三・四、一九七三—七四年、参照。

(12) たとえば、トランシルヴァニアのボボヴィッチの「大オーストリア合衆国」の思想は、最も有名なものである。Aurel C. Pop-

ovici, Die Vereinigten Staaten von Gross-Österreich, 1906.

むすび

本稿の目的は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国におけるハンガリーの地位を正確にとらえるとともに、ハンガリーの複雑な内部構造と、そこにおける民族運動のいりくんだ性格を、主として経済的・社会的側面から解明することであった。そのために行なわれた多角的検討ののちに、最後にそれらを総括し若干補足的な考察をつけ加えて、結論にかえたいと思う。

二重帝国におけるハンガリーの地位は、在来のハンガリー史家の多くが主張するように、単に従属的なものではなかった。それは、二重帝国の経済生活において支配的地位を占めることはなかったが、しかし、抑圧、強奪、半植民地といった言葉の意味するような従属的国家ではなく、むしろオーストリアとの結びつきは、経済的な点で、ハンガリーのために大きな利益をもたらした。おくれた弱体なパートナーであったハンガリーは、二重帝国全体にまたがる統一関税地域内の農・工分業体制に依存して、自己の経済発展をはかることができ、またオーストリアから大規模な資本提供の便宜をうけて、資本主義的工業化にのり出すことができた。そしてこの十九世紀後半以後の著しい経済成長こそ、ハンガリーを伝統的な経済条件のもとに停滞している後進国の間から引きあげたものであった。

しかしハンガリーの急速な経済成長も、この国の社会構造の旧い性格――大土地所有や封建制の残滓――の一掃には成功せず、生活水準の改善といった重要な社会問題を解決することもできなかった。それは社会の近代化ないし民主化をもたらさずに、かえって社会的緊張や矛盾を増大させ、二十世紀にはいると、マジャール人と従属諸民族の間

の対立をいっそう激化させた。十九世紀前半の改革時代に近代化の推進者として進歩的な役割を果たしたジェントリーは、一八四八～四九年の革命後、経済的に衰退するとともに精神的に退化し、政治的に反動化して、ふたたび貴族的支配体制と癒着した。ハンガリーの経済成長はかなり強力なブルジョア階級を生み出したが、この国の資本主義的発展を主として担ったユダヤ人資本家は、マジャール人に同化し、旧体制からの独立という西欧的理想を追求することなく、かえって旧来の社会＝政治体制に依存し、それを補強する役割をはたした。

非マジャール系従属諸民族との関係では、ハンガリーの急速な経済成長は、領内諸地域の経済的水準の差を縮め、王国内部の経済的なつながりを一段と強化した点で、統合的役割を果たしたが、他方また不可避的に、非マジャール人の農民的社会の分解を促進し、民族ブルジョアジーを強める一方、大衆の自覚を高めた点で、分解的な力として作用した。そして諸民族のブルジョアジーは、自己の民族運動のなかに民主的・社会的な綱領をもりこんで、農民・小市民・プロレタリアートを自己の傘下に結集しようとした。マジャール人の大地主と大資本家が支配した当時のハンガリーでは、諸民族のブルジョアジーとプロレタリアートはともに被害者であったから、本来は異質的な両者の間に一時的な共同作業の成立する可能性は十分存在した。ハンガリーにおける民主化や変革の推進力は、このような民族ブルジョアジー、ブルジョア的知識層、プロレタリアートをおいてはなかったのである。しかし彼らも、国内の民主化、支配体制の打倒、帝国解体のための内的・社会的・政治的な前提をつくることはできたが、この目標をみずからの手で早急に実現するだけの力はなかった。

次に、ハンガリーの貴族的支配体制の性格と、それが最後まで存続することを可能にした諸条件に目を向けよう。その際まずあげなければならないのは、歴史的・伝統的要因である。ハンガリー社会の強固な基礎をなし、ハンガリーの政治体制を一貫して支えてきたのは、土地貴族のマグナートとジェントリーであり、この二つが厳密な意味での

ハンガリー国民を構成した。マジャール人貴族は全体として単一の集団をなし、征服権に由来する彼らの特権によってハンガリーにおけるマジャール人の優越を正当化し、トルコおよびハプスブルク家支配の間も、旧来の州組織をよりどころにして自治の伝統とハンガリーの権利を保持した。彼らはハンガリーを多民族国家とはみず、その存続はマジャール的性格の維持にかかると信じ、自己の特権を守る固い決意をもっていた。ただ十九世紀前半には、ジェントリーが指導権をにぎって自由主義的改革を進めようとしたために、貴族の間に一時分裂が起こったが、一八四八年の革命後ジェントリーは時代の流れに即応できず、経済的に重大な打撃をうけて貧困化するとともに反動化し、貴族の一体性を恢復した。彼らは行政勤務に殺到して、官僚制に保守的な社会観と生活様式を賦与し、貴族的支配体制の存続に貢献した。

このようなハンガリーの支配体制の基礎は、土地貴族とりわけ大貴族マグナートの封建領主としての経済力であった。一八四八年の農民解放後も、大土地所有者や保守的支配層の権力はそのまま保存されたばかりか、外国資本の流入は「プロイセン型」資本主義農業の発展を可能にして、マグナートの力をかえって強化し、二重主義の経済的基礎もまた、これに大きな恩恵を与えた。特殊な民族構成のハンガリーにおいて、マジャール人の大地主は、自己の利害を守るためにはすべてのマジャール人民族主義者の協力をえることができたが、あらたに出現した新しいユダヤ人資本家も、マジャール化されてハンガリー社会に参加することに魅力を感じた。こうして貴族と資本家の提携が成立し、自由党の長期にわたる政権担当の基盤は、この党とユダヤ人資本家の間に存在した暗黙の同盟であったといわれている。二十世紀にはいって、工業の発展の前にマグナートの経済力が相対的に低下しはじめた時期には「封建化」されたユダヤ人資本家がこれにてこ入れして、貴族的支配体制の存続を可能にした。

貴族的支配体制の最も直接的な存立条件は、ハンガリーの議会制度[1]であった。議会は二院制で、上院は世襲議員と

終身もしくは高位の官職に在職中任命される議員から成り、具体的には、男爵から公爵に至る称号貴族の成年男子、ローマ＝カトリック教会および合同東方カトリック教の主要な役職、指名をうけた裁判官、県知事、クロアティア議会の三人の代表者から構成され、主として大貴族の機関であった。十九世紀末には、議会の重要性はすでに下院に移りつつあったが、その下院は選挙権の不平等によって、多数国民の意志とはまったく無関係な寡頭的組織であった。四五三名の議員のうち四〇名はクロアティアの地方議会から選ばれ、その他は特定の資格をみたす成年男子によって直接選ばれたが、その資格はさまざまで、財産・教育・職業にもとづくはなはだ制限されたものであり、五十以上のカテゴリーの選挙人が存在した。候補者はマジャール語の知識をもたねばならず、選挙区は、一部は人口密度により、一部は経済的・民族的考慮にもとづいて配置され、また投票は口頭で行なわれたので、強制や威嚇への道が開かれた。要するに、この制度で選挙権を与えられたのは人口の六％強にすぎず、一八七四年の選挙法では、一、五三〇万の総人口中有権者は約八〇万、四〇〇名余の下院議員中非マジャール系議員はわずか一〇名内外にすぎなかった。[2] こうして、人口の過半数をしめる非マジャール系諸民族とマジャール人の下層階級は、排除されてしまった。六％の有権者のうちには少数の上層ブルジョアが含まれており、彼らに選挙権が拡張されたことは、貴族とブルジョアの連合を示すものであり、貴族は上層ブルジョアジーという同盟者に助けられて、マジャール人の民族的政策を押し進めたのである。

アウスグライヒ後下院の主要な構成要素を成した地主貴族は、ショーヴィニスティックといえるほど民族主義的であり、マジャール人以外のものを社会的に劣ったものとみなし、彼らに基本的な政治的権利を否認し、これら諸民族に対する自己の絶対的優位を保持するために、一貫してマジャール化政策をとり、言語の問題を中心に強い圧迫を加え続けた。マジャール人優位の政策は、非マジャール系諸民族の同化をめざすものであったから、彼らが自己の民族

性と自国語を放棄する場合には、体制の価値配分にあずかることもできたが、さもないかぎり、きびしく抑圧された。一八六八年に制定された民族法は、マジャール語を唯一の国定語としながらも、中・小学校における諸民族語の権利と、低いレベルの行政面での民族語の使用を認めていたが、その実施にあたっては、制定の際の比較的自由な精神は見失われてしまった。非マジャール系諸民族に対する偏狭な態度では、自由党も独立党も大差なかった。このマジャール化政策は、一方でユダヤ人やドイツ人の資本家その他を進んでマジャール化させるとともに、他方でマジャール化を拒む要素を排除し、ハンガリーの貴族体制の維持を可能にするうえでかなりの効果をおさめたことは、否定できない。

このような貴族的支配体制が変革される可能性としては、次の三つが考えられる。第一は、体制内部から開明的・自由主義的改革路線が出現することであり、第二は王による変革であり、第三は民衆による革命である。第一の方向は、一八四〇年代におこった、進歩的ジェントリーや一部の開明的マグナートを中心とする貴族的自由主義運動のうちにみることができるが、十九世紀後半ジェントリーの衰退とともにその進歩性は失われ、二十世紀の前夜には、極端な民族主義と権威的な保守主義に分裂する危険な兆候を示していた。十九世紀後半のハンガリーの政治は貴族とブルジョアジーの妥協のうえに立つものであったから、経済的発展と物質的進歩には力が注がれ、経済上の自由主義政策はとられたが、社会的・民族的な改革を行ない、この国の政治生活のなかに民主的な手続を設けようとするあらゆる努力には、強く対立した。一八四八年当時、指導的なジェントリーの打ち出した自由主義的ナショナリズムは、その後徐々に保守的要素をしみこまされていったが、この保守的ナショナリズムの主要な機能は、独立への志向と入り混っていたとはいえ、上層階級が他の諸民族および下層勤労階級に対してヘゲモニーを維持することのできる現存社会制度を保存することであった。それゆえ、ハンガリーの支配体制が内部から改革されることは、まったく不可能であ

ったばかりか、二重帝国におけるハンガリーの地位こそ、社会における保守的傾向の維持に貢献し、反民主的な社会的・政治的見解の強化を助けたのである。

次に王による革命の可能性をみよう。国王(＝皇帝)は、ある意味でハンガリーの貴族的支配体制を変革する力のある唯一の人物であった。一九〇五年の政治的危機に皇帝が勅令による普通選挙法の導入を示唆したことは、この点で注目に値する。しかし選挙権の民主化は、マジャール人民族主義派の強硬な主張を抑えるためのおどしの道具として使われたにすぎなかったから、貴族が腰くだけになって大切な選挙制度のとりでの背後に退くと、皇帝はそれ以上ハンガリー貴族に挑戦するつもりはなく、選挙法改正は握りつぶされてしまった。ハプスブルク王朝の遵法主義と保守主義があるかぎり、王によるハンガリー支配体制の変革はありえず、逆に王こそこの体制の強力な支柱として、外部からこれを補強したのであった。王は、ハンガリーの自由党が二重主義路線を守るかぎり、終始これを強く支持し、それへの抵抗を抑制した。オーストリア皇帝にとって二重主義体制は必須の大前提であり、ハンガリーは不可欠のパートナーだったからである。なおドイツ帝国が独墺同盟を通じてハンガリー政治体制の有力な援護者であったことも、見のがすわけにはゆかない。

第三の民衆による革命も、当時の状況下では考えられなかった。諸民族の民族ブルジョアジーはたしかに民主的改革への意欲に燃えてはいたが、それ自身大した勢力ではなく、議会での活動もごく限られていたうえに、全体的統合を志向する経済的発展からかえって恩恵をうける面もあった。労働者との共同戦線も成立の可能性はあったが、基本的対立を含み、その関係は流動的であった。他方ハンガリーの工業労働者は次第にその数を増し、一八九〇年十二月には社会民主党が設立され、労働組合運動も出現した。しかしハンガリー社会民主党はオーストリアの党ほどの成長度に達しておらず、指導者もオーストリアのそれに比べて遜色があり、真の政治力とはいいがたかった。党の綱領も、

オーストリアの姉妹党のハインフェルト綱領をまるごと採用していた。党や組合の実際のメンバー数も取るに足らぬものであったし、全国の労働者のうち有権者がわずか二％にすぎぬ状況では、社会主義者が議会に代表を送ることは、考えられもしなかった。(3) ハンガリー労働者の大部分は農村との関係をもち続けており、社会主義の理論や目標にはほとんど理解がなく、「ホームシックのおきかえられた農民」にすぎなかった。(4) その農民もまた、若干の活動的グループ以外は、相変わらず不機嫌で疑い深く、表面は屈従的であったが嫉妬深く、ほとんどが非政治的であった。労働者の政治運動はすでにかなり活発化していたけれども、なお一部の現象にとどまり、第一次大戦前にはとうてい社会的変革を単独で実現するだけの力はなかった。「民衆の革命」の基礎と前提はすでに準備されていたけれども、諸勢力がなお弱体で、発展の方向も分裂し十分整理されていなかった状況のもとでは、その実現は期待されなかった。このような諸事情に幸いされて、ハンガリーの寡頭的支配層は、特殊な選挙制度をよりどころに、第一次大戦末期まで彼らの権力を無傷のまま維持することができたのである。

しかしそれにもかかわらず、貴族的支配体制が絶対に強固なものではなく、内部に幾多の矛盾や弱点を包蔵していたことは、事実であり、しばしば危機に直面せざるをえなかった。それはとりわけオーストリアとの関係のうちに見出され、この時期のハンガリー内政の中心問題となっていた。

ハンガリーは一五二六年にハプスブルク家の支配下にはいったが、それ以後のこの国の政治史は、君主に対する関係についての周期的な問い直しと再確認の繰り返しであったといえる。ハプスブルク家の支配が彼らに満足なものであるならば、それは維持さるべきであったが、不満足であることがはっきりすれば、修正を控えるべきではなかった。しかも一八六七年に達成された二重主義体制は、変更できない事実として受けいれられたわけではなかったから、アウスグライヒの維持か修正かという「公法上の大争点」が、ハンガリー政界の中心テーマとなったのである。

議員たちはこの問題に熱中し、他のすべてにまさる優位を与えた。人口の六%にすぎない選挙民に選ばれた彼らは、一般的な内政問題についてはすべて同質的な見解をもち、大争点以外の分野に迷いこむことはなかった。政党の編成もほとんどこの争点によって決定され、若干の少数党を除いて、自由党と独立党の二つに大きくまとめられた。自由党とその支持者は、アウスグライヒをハンガリーの積極的利益とみなして、二重主義の原則を守り、王朝および軍隊に対する依存関係を維持しようとした。これに対して独立党とその支持者は、アウスグライヒをハンガリーの自主権を拡大する方向で修正し、それ自身の軍隊と外交と独立関税地域をもつことを要求した。大争点についての両政党の立場の不一致は、ハンガリー支配階級の内部分裂を意味したが、このような基準の絶対化は、議会を非生産的な論争の繰り返される舞台に転落させ、その間にハンガリーの支配階級は現実の重要な諸問題を無視し、ますます「進歩」との接触を失っていった。これはまさに貴族的自由主義の危機であり、一八九〇年の自由党政府の瓦解とそれに続く二十世紀初頭の諸政府の不安定は、まさに支配層の内的構造の危機を示したものにほかならなかった。

大争点をめぐる対立の背後には、もとより経済的背景があった。二重主義の一員であることの経済的利益は、程度の差はあれ最後まで続いたから、オーストリアとの提携に根本的利益をみいだす自由党の勢力は一貫して強く、終始二重主義体制の確保を目ざしていた。しかしまた、二重主義の共同市場は農業や畜産には好都合であったにしても、ハンガリーの工業化にとって一つの阻止的役割を果たしたから、一部支配層の反発をよび、ハンガリーの工業化がある程度進んだのちには、いっそう現実的なナショナリズムの感情をよびおこし、君主の共通を除いてオーストリアからの完全な自立をめざす独立党が力を得たのである。しかし彼らは、共同であることの利益を放棄しようとは考えず、何の犠牲も払わずに独立を得ようとした。二重主義体制から利益を得ながら独立を求めるというのは、矛盾した不徹底な態度であり、ハンガリー支配層における政治的リアリズムの欠如がうかがわれる。したがって独立党も決定

的な力とはなりえず、皇帝はこれを見透して、普通選挙の導入を示唆して彼らを脅かすことができ、この脅嚇にあって独立派は後退せざるをえず、一九〇五年の危機以後は次第に温和化した。ただ独立派の活動はナショナリズムの高唱によって皇帝からすこしずつ譲歩をかちとることができた点で、有効であったといえる。以後二つの政治的傾向はたがいに刺激を与えあって接近し、自由党も単なる原則の保持にとどまらず、二重帝国内におけるハンガリーの力の増大を図るようになり、独立党も二重主義の枠内でハンガリーの優位を確保しようとする態度をとった。その背後には、内外の政治的緊張の高まりが否応なしに帝国軍隊に対するハンガリーの依存度を強めたという事情もあった。

それ以外にも、ハンガリーの貴族的支配体制は、さまざまな危険に脅かされていた。工業の発展は相対的にマグナートの勢力を低下させていたし、諸民族のブルジョアジーやプロレタリアートの挑戦も次第に強くなっていった。同時にまた政府の諸民族に対する抑圧やマジャール化政策も次第にはげしくなり、ヒステリックになっていった。マジャール人議会が民族主義を高くかかげてオーストリアとのつながりの弛緩を要求したとき、それは実際には、みずからの弱点を騒音で包みかくすためのものにほかならなかったし、他民族に対するショーヴィニスティックな抑圧は、革命に脅かされて前途に絶望的な不安を感じた貴族が、どうにか生き残るために現状を維持しようとする防衛的な試みであったと、デアーク教授は述べている。(5)

要するに第一次大戦直前のハンガリーの貴族的支配体制は、矛盾と動揺をはらみつつ、不安定な均衡のうえにかろうじて存続を保っていたということができる。それは歴史的・伝統的惰性と二重主義体制に支えられ、また対抗する諸勢力の弱体と分裂に助けられて、実体以上の虚勢を示しつつ、第一次大戦末まで存続したのである。

結局ハンガリーの支配体制が顚覆するためには、第一次大戦という外部からの強圧が必要であった。戦争末期に中欧諸強国が軍事的に敗北し、これによって生じた好都合な内外の情勢を諸民族の民族運動の指導者たちがうまく利用

したことによって、二重帝国は崩壊した。しかし、諸民族が独立したあとの残滓国家ハンガリーの内部では、諸勢力の間に十分な整理も統一もできあがっていなかった。貴族はなおかなり強く、ユダヤ人資本家の協力もあり、革新的勢力はなお弱体であったから、ハンガリーの政局はその時々の諸条件、特に国際的な力関係の強い影響をうけつつ、カーロイからベラ＝クンをへてホルティへの道を歩まねばならなかったのである。

ところで、一方で従属諸民族に対する抑圧のうえにユダヤ人資本家と妥協をはかりながら自己の歴史的伝統を保持し、他方で強力なパートナーとの結合から利益をうけつつこれに対抗して自己の勢力増大をはかろうとした二重帝国下のハンガリーの歩み、この特殊で複雑な重層構造は、単にこの国だけのものではなく、特殊な状況におかれた中進国が自国の近代化を進めるうえの一つのパターンともいうべきものであり、現在のわれわれにとっても単なる他所事ではない。オーストリア＝ハンガリー二重帝国研究のもつ重要性と大きな興味は、この点に存するのである。

(1) May, op. cit., p. 42 f.; Kann, op. cit., p. 82.

(2) 一九一八年の崩壊に先立つ最後の選挙でも、クロアティア＝スラヴォニアを除くハンガリー本土で、マジャール人の四五〇議席に対し、人口の約四五%にあたる他の諸民族は、八議席であった。Kann, op. cit., p. 70.

(3) ハンガリー社会民主党は、そのうえ、体制の側から極端な敵意と反感をもって眺められた。それは、この党が体制の利益を脅かすものと考えられたばかりでなく、その綱領が国際的性格をもち、またその指導者が非マジャール系の人々から構成されていたためでもあった。孵化期を経たのちには、その指導者はほとんど全部（マジャール化されない反体制的）ユダヤ人になっていたのである。

(4) Sugar, op. cit., p. 74.

(5) Istvan Deak, "Comments", Austrian History Yearbook, Vol. Ⅲ, pt. 1, 1967, p. 305